



ごあいさつ

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) は、子ども達をめぐる諸問題、特に育児・保育・教育に関して広くインターネット上で情報交換し、解決の道を研究する「子ども学研究所」として、日本語サイトを1996年に設立しました。国外との情報交換のために、英語サイト(1996年～)、中国語サイト(2005年～)も活動しています。また、インターネット上だけでなく、中国を中心とした東アジアとの子ども学交流プログラムなど、子ども学を柱にした研究活動を開催しております。

子どもの問題に関心をお持ちの方なら、どなたでもまず CRN にアクセスしていただきたい。年齢や性別はもちろんのこと、研究に重要な学問の専門分野が何であってもよいのです。いろいろな学問分野の方々に参加する学際性こそが子ども学であり、CRN にとっては重要なのです。また、親御さんのような、子育ての現場の方にもご発言を期待しています。それが問題解決に重要なヒントを与えることが多いからです。

検討する問題が何であるかは、アクセスされる方々によって決まります。どうかご関心のあるテーマをご発表ください。共に子どもにとってより良い解決法を探りましょう。



チャイルド・リサーチ・ネット所長

小林 登

活動履歴

- 1996 ・日本語・英語サイトオープン
・シンポジウム「マルチメディア社会の子どもたち」
- 1997 ・シンポジウム「中高生のデジタルな友達づくり」
・ジェーン・グドール博士講演会
・ジェイ・ベルスキー博士講演会
- 1998 ・英語サイトリニューアル
・国際シンポジウム「メディアは子どもをどう育てるのか？」
・ジェーン・グドール博士講演会
・CRNサイト「WEBデザインアワード」銀賞受賞
- 1999 ・公開座談会「学級崩壊はしついでいくとめられるのか？」
・国際プレイショップ「PLAYFUL」
- 2000 ・公開座談会「『学校』と『家庭』を結ぶもの」
・プレイショップ「Feel the Media」
・国際シンポジウム「21世紀の子育てを考える」
- 2001 ・プレイショップ「ふゆものがたり～プレイフルストーリーをつくろう」など
・研究拠点「ながやまチーきち」開設(～2002年)
・音のワークショップ(～2003年)
- 2002 ・CRN 実践保育研修会「保育の質を考える一心とからだを育む視点から」
・プレイショップ「カラフル王国で遊ぼう」など
・CRN メンバーサイトオープン
・「子ども学研究会」発足(～2003年)
- 2003 ・日本語サイトリニューアル
・「日本子ども学会」設立
・ワークショップ「こがねいメディアキッズ」(～2005年)
- 2004 ・「第1回子ども学会議」(「日本子ども学会」学術集会)
・チャイルド・サイエンス懸賞エッセイスタート
・中国の子ども研究機関を訪問(中国 北京)
- 2005 ・中国語サイトオープン
・「第2回子ども学会議」(「日本子ども学会」学術集会)
・宋慶齡基金会の招聘を受け小林所長が講演(中国 上海)
- 2006 ・子どもの健康に関する学会にて「食育」をテーマに分科会を開催(中国 長春)
・「第3回子ども学会議」(「日本子ども学会」学術集会)
・中国政府主催のシンポジウムにて小林所長が講演(中国 上海)
- 2007 ・CRN設立10周年記念国際シンポジウム開催
・「第4回子ども学会議」(「日本子ども学会」学術集会)
・第1回 東アジア子ども学交流プログラム開幕式(中国 上海)
・第1回 東アジア子ども学交流プログラム集中講義・幼児教育展覧会開催(中国 長沙)
- 2008 ・日本語サイトリニューアルオープン

所在地

〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105
神保町三井ビルディング15階 (株)ベネッセコーポレーション 内

運営体制

所 長：小林 登(東京大学名誉教授、国立小児病院名誉院長、
子どもの虹情報研修センターセンター長)

顧問：石井 威望(東京大学名誉教授)
コーディネーター：劉 愛萍(ベネッセコーポレーション)
松本 留奈(ベネッセコーポレーション)

CRNは株ベネッセコーポレーションの支援のもとに運営されています。Benesse®

第15回社会保障審議会
少子化対策特別部会
平成20年10月22日

参考資料5

Welcome to **CHILD RESEARCH NET**

チャイルド・リサーチ・ネット
<http://www.crn.or.jp/>

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) は、
子ども学 (Child Science) の研究機関です。

インターネットによるネットワークと、シンポジウム、講演、プレイショップなどの研究活動を通し、世界中の研究機関や研究者と交流しながら、子どもを取り巻く諸問題の解決に取り組んでいます。



English <http://www.childresearch.net/>
中 文 <http://www.crn.net.cn/>

の活動をご紹介します。

インターネットのネットワーク

従来の学問分野を越え学際的、国際的に、子どもに関する研究を進めようと、インターネットでのネットワークを構築しました。ここに集められた知見や問題解決のための知恵を使って、子どもを取り巻く諸問題を解決していきたいと考えています。

日本語・英語・中国語の三言語によるサイトには、子どもに関する研究成果や論文・レポート、データが掲載され、さまざまなテーマで議論する場も設けられています。

子どもたちの未来のために、みなさんからのアクセスをお待ちしています。

2008年3月27日、日本語サイトをリニューアルオープンしました!



研究室を訪れる

テーマごとに有識者が集まり、子どもに関する研究を進めています。その研究成果をご覧いただけます。

論文・レポートを読む

さまざまな分野の専門家から届けられた、子どもに関する論文・レポートをご覧いただけます。

データを探す

子どもに関する調査データをご覧いただけます。大部分のデータが、ダウンロード可能です。

イベント情報を見る

子どもに関するイベントをご紹介します。CRN が開催するイベントの予定・実施報告もご覧いただけます。

子ども学部情報

学部・学科名称に「子ども学」を掲げる、大学や短期大学に関する情報をご紹介します。

子ども学を柱にした研究活動

子どもたちをめぐる問題について、国境、学問の壁を越えた人々が集い、語り、考える場を作っています。テーマに合わせ、シンポジウム、講演会、講義、展覧会、ワークショップなど、さまざまな形式を取っています。

最近の活動例

CRN設立10周年記念国際シンポジウム

「子ども学から見た少子化社会～東アジアの子どもたち～」
(日本 東京) (2007年)

CRN 設立 10 周年を記念し、東アジア各国共通の問題である「少子化」をテーマに子どもの未来を考える国際シンポジウムを開催しました。

出演者: 大江 健三郎(作家・ノーベル文学賞受賞)

章 鈺(工学博士・中国工程院院士)

榊原 洋一(お茶の水女子大学 教授)

李 根(梨花女子大学 教授)

朴 正漢(テグカトリック大学 教授)

周 念麗(華東師範大学 副教授)

原田 正文(大阪人間科学大学 教授)



第1回 東アジア子ども学交流プログラム

(中国 長沙) (2007年)

子どもの成長・発達と生活環境について、日本と中国の共通点と相違点をお互いに学び合い、医学、発達心理学、教育学、社会学などを統合した子ども学の立場から、何をすべきかを考えました。

講演者: 小林 登(CRN 所長・東京大学名誉教授)

多田 千尋(おもちゃ美術館 館長)

朱 家雄(華東師範大学学前教育研究所 所長)

安梅 勲江(筑波大学 教授)

榊原 洋一(お茶の水女子大学 教授)



集中講義



日本の幼児教育を紹介する展覧会

※CRNの活動は、随時サイト上で報告いたします。

※出演者・講演者は、順不同です。また、肩書きは2008年3月現在のものです。

CHILD RESEARCH NET

子ども学 (Child Science) 研究機関
チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)

ニュースレター

<http://www.crn.or.jp>

vol.1

創刊特別号

ニュースレター 発刊にあたって

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) は、設立13年目に入るにあたって、サイトリニューアルを行い、ニュースレターを発刊する事となった。この機会に、更に多くの方々にCRNの目指しているものを御理解頂き、より積極的にわれわれの活動への御参加をお願いしたいからである。

CRNのそもそもの始まりは、Norwegian Center for Child Research (ノルウェー国立子ども学研究センター) が1992年にベルゲンで開催した国際会議“Children at Risk”「危機にある子ども達」の終了後、出席した各国代表が集まって開かれた非公式の会合にある。そこで、1989年の国連で認められた「子どもの権利条約」を受け、21世紀に向けわれわれは何をすべきかが話し合われた。その結果、ともかくも世界の子ども問題に関心を持つ学者、研究者、実践者をインターネットでつないで、協力して考えようという事になったのである。

考えてみれば、これは北欧ならではのアイデアである。第1に、北欧の国々は子どもを大切に国民性がある。例えば、スウェーデンのエレン・ケイは20世紀冒頭に「子どもの世紀」を発表しており、ノルウェーでは「子どもの日」と「憲法記念日」は同じ日であり、フィンランドでは戦後、子どもの包括的な医療・保健を目指す「子どもの城」を作った。その上、インターネットを利用するという、ITの発達した国、ノルウェーの発想そのものにも感銘を受ける。

1996年、国立小児病院を退官した機会に、この国際的な動きに対応すべ

く、ベネッセコーポレーション会長 福武總一郎氏 (当時は社長) にお願ひして、会社の事業とは関係なく、中立的な研究機関としてCRNを立ち上げさせて頂いた。当初は日本語版と英語版であったが、2005年に中国語版が加わって、現在3つの言語で活動している。皆さん方の御支援のお蔭で、月間アクセス数は日本語版約50万、英語版、中国語版がそれぞれ約15万となっている。

あらためてここで、CRNの目指している事を整理してみたい。20世紀に、子どもに関係する問題を研究する学問は大きく進歩した。小児医学然り、小児心理学然り、小児行動学然り。しかし、問題解決となると、その多様性も関係すると思うが、まだまだである事は御存知の通り。それに対応するものと考えられるが、北欧の国々では1980年代末より“Child Research”、イギリスでは1990年代に入って“Child Studies”と、子どもに関係する学問を統合し、包括的、学際的、環学的に研究して、問題解決を図ろうとする動きが出てきた。私達はそれを「子ども学」“Child Science”とした。人間の生物学的側面と社会的側面を併せて科学的に捉える「人間生物学」“Human Biology”、更には「人間科学」“Human Science”の子ども版とも言えよう。

CRNとしては、上述の学問的な立場を基盤にして、子どもに関心を持つ色々な専門家、実践家、研究者、更に親は勿論の事、出来るならば子ども達自身も加わって、皆が一同に会してネット上でまず話し合う事が目的である。

そして、「子ども学」の立場から問題の検討を進め、その成果をCRNで発表したいと考えている。CRNはこの様にして、「21世紀こそ子どもの世紀>に」したいと願っているのである。

関係の皆様方、どうぞ私達の意図を御理解頂き、一緒にわれわれの目的に向け進もうではありませんか。



Child Research Net 所長

小林 登

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) とは?

- 「子ども学」研究所です。「子ども学」を柱に、インターネットによるネットワークと、シンポジウム、講演、プレイショッブなどの研究活動を生かし、世界中の研究機関や研究者と交流しながら、子どもを取り巻く諸問題の解決に取り組んでいます。

1 東アジア“子ども学”交流プログラム発足

東アジア“子ども学”交流プログラムは、2007年11月に発足し、今年2年目を迎えることとなります。第1回の開幕式と総会は2007年11月に中国で開催され、第2回は2008年4月に日本で開催されました。

■第2回活動報告

(2008年4月19日、20日 お茶の水女子大学)

★子どもの成長・発達と生活環境-子ども学的アプローチ-

小林登 (CRN所長、東京大学名誉教授)、朱家雄 (華東師範大学教授)、秦金亮 (浙江師範大学杭州幼児師範学院院長)、黄紹文 (長沙師範専科学校副教授)、内田伸子 (お茶の水女子大学副学長)、榊原洋一 (お茶の水女子大学教授)、山本登志哉 (早稲田大学教授)、首藤美香子 (お茶の水女子大学研究員)、一見真理子 (国立教育政策研究所総括研究員)、一色伸夫 (甲南女子大学教授) ※名前は登壇順

第2回東アジア“子ども学”交流プログラムは、2008年4月19日、20日の2日間にわたって、チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) とお茶の水女子大学G-COEによる主催、ベネッセ次世代研究所による共催のもとで開催されました。

テーマは「子どもの成長・発達と生活環境—子ども学的アプローチ」。子ども関連の研究者、お茶の水女子大学の学生、子どもに関心を持つ200名余りの方が、足を運んでくださいました。

初日は、小林登CRN所長の挨拶に始まり、基調講演では華東師範大学の朱家雄先生が、最近日本で放映されて話題になったNHKスペシャル「小皇帝の涙」を中国人の立場から考察し、大変関心を集めました。そのほか、浙江師範大学の秦金亮先生は「発達認知神経科学研究の進展が幼児教育にもたらす意義」、長沙師範専科学校の黄紹文先生は「幼稚園教諭養成」についての発表を行い、中国での脳科学と幼児教育の研究および幼稚園教諭養成の現状について紹介しました。

2日目は日本の研究発表が中心となりました。早稲田大学の山本登志哉先生は「日中比較の中で見えてくる『文化としての子どもの発達』」、お茶の水女子大学の首藤美香子先生は「日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ」、国立教育政策研究所の一見真理子先生は「幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ」というテーマで講演を行いました。日中文化・育児観の比較調査や中国の子ども観の歴史的な流れを踏まえながら、中国の幼稚園や小学校の映像とともに、日中子ども交流史にまで及ぶ幅広い研究と興味深い史料が数多く紹介されました。

2日間にわたり日中両国の研究者6名による講演と、それぞれの日の最後には日中の講演者全員によるシンポジウムが

行なわれ、議論がさらに深められました。

どのような国についても、歴史や文化背景を無視して教育を語ることはできませんから、お互いの違いを知り、理解し、尊重しあい、学びあっていくことが大切です。「子ども学」という視点を共有することで、日中の研究者がさらに交流を深め、好ましい関係をつくり上げていくものと期待したいと思えます。



「東アジア“子ども学”交流プログラム」概要

趣旨：育児・保育・幼児教育に関係する日中の大学、教授の相互交流講義を支援し、子ども学の普及ならびに国際化を目指す。その結果、子どもを取り巻く諸問題の解決や環境改善に役立つような学術活動を推進する。

主催：チャイルド・リサーチ・ネット、華東師範大学

協賛：(株)ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所

後援：中華人民共和国駐日大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議

事務局：チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)

〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105
神保町三井ビル16F (株)ベネッセコーポレーション内

■開幕式と第1回活動報告

(開幕式 2007年11月12日 華東師範大学)

(第1回活動 2007年11月13日、14日 長沙師範専科学校)

★開幕式

2007年11月12日、上海華東師範大学にて、本プログラムの開幕式が行われました。華東師範大学学前教育研究所所長の朱家雄先生と小林登CRN所長の間で、調印式とテープカットの儀式が行われ、プログラムの長期的な継続のため、お互い協力していくことが約束されました。



★講演&幼児教育展覧会

小林登 (CRN所長、東京大学名誉教授)、多田千尋 (おもちゃ美術館館長)、朱家雄 (華東師範大学教授)、安梅勅江 (筑波大学教授)、榎原洋一 (お茶の水女子大学教授) ※名前は登壇順

2007年11月13日、14日、毛沢東の恩師が設立した長沙師範専科学校で日本幼児教育展覧会と日本の研究者より集中

講演が行われました。「子ども学」の視点を踏まえて、5名の先生方が脳科学、医学、育児、遊びというテーマで、それぞれのご専門の立場から育児・保育・教育について論じました。

初日は、湖南省政府の要人、湖南省幼児教育委員会の幹部などが挨拶を行い、500名近くの幼児教育関係者が出席しました。小林登CRN所長は、情動の「子ども学」という題で、「生きる喜びいっぱい Joie de Vivre」は、子どもの心身発達にとって必須であると、脳科学の知見を織り込んだ講演を行いました。

学際的、総合的に子どものことを考える「子ども学」の理念に、中国の幼児教育の先生方から多くの賛同を得られました。



2日目は200名近くが出席し、日本からの先生方の講義+演習、デモなどを交えてtwo-wayの交流を行ないました。講演期間中は、日本の幼児教育に関する展覧会も同時開催し、中国の幼児教育現場の先生方に、日本の幼児教育の歴史や玩具を知ってもらう良い機会となりました。

2 CRN設立10周年記念国際シンポジウム

★子ども学から見た少子化社会-東アジアの子どもたち-

大江健三郎 (作家)、韋鈺 (東南大学教授・中国)、榎原洋一 (お茶の水女子大学教授)、李根 (梨花女子大学教授・韓国)、朴正漢 (テグ・カトリック大学教授・韓国)、周念麗 (華東師範大学副教授・中国)、原田正文 (大阪人間科学大学教授) ※名前は登壇順

2007年2月3日、国連大学ウ・タントホールでCRN設立10周年記念国際シンポジウムが開催されました。シンポジウムのテーマは「子ども学から見た少子化社会-東アジアの子どもたち」。

この国際シンポジウムでは中国、韓国、日本3か国の学者により少子化社会の現状を踏まえた、子どもの成長、養育環境についての活発な議論がなされました。

午前中はノーベル賞作家の大江健三郎先生が、「子ども-人間の未来」のモデルをテーマに特別講演を行い、続けて中国前教育部副部長、東南大学教授韋鈺先生が「脳科学と教育」をテーマに基調講演を行いました。午後は「子どもの成育環境としての少子化社会を考える-日中韓の研究を中心に-」というテーマで日中韓3か国の研究者がシンポジウムを開き、各国の子どもの視点からみた少子化の現状および背景と問題点について、エビデンスに基づいた討論が行われました。

このシンポジウムは、1996年に設立されたCRNの活動10

周年を記念して開催しました。小林登CRN所長は講演者や参加者への謝辞の中で、これからの展望を以下のように示しました。「私は、Ellen Key の理想を追って、新しい意味で「21世紀こそ子どもの世紀」にする為、世界的なネットワークを作り、力を合わせて努力する事が重要であると、現在考えています。」



東アジア子ども交流プログラム及び国際シンポジウムの講演の詳細はCRNホームページの「イベント情報を見る」に掲載しています。そちらをご覧ください。

<http://www.crn.or.jp/LIBRARY/EVENT/sympo07/index.html>

3 日本語版サイト リニューアルオープン!

2008年3月、CRN日本語サイトをリニューアルオープンしました。

過去13年の膨大なアーカイブを生かしつつ、「このサイトで何が出来るかすぐ分かる」「知りたい情報にすぐたどり着ける」シンプルなサイトに生まれ変わりました。

リニューアル後のCRNをご紹介します!



研究室を訪れる

テーマごとに有識者が集まり、子どもに関する研究を進め、その成果をご覧いただけます。

研究テーマ例: 「子どもとメディア」「ドゥーラ」「児童学 & 子ども学」「ソーシャル・スキル・トレーニング」など

論文・レポートを読む

さまざまな分野の専門家による、子どもに関する論文・レポートをご覧いただけます。

連載中のコーナー:

- 「心のカルテ」(西焼津こどもクリニック院長 林隆博)、
- 「子ども達の理学療法の現場より」(びわこ学園医療福祉センター草津 理学療法士 高塩純一)
- 「教員のスキルアップで「落ちこぼれ」を救う」(アンダンテ西荻教育研究所代表 金子晴恵)

データを探す

子どもに関する調査データをご覧いただけます。

最近のデータ:

- 「第4回学習指導基本調査報告書(2008年発行)」
- 「第3回子育て生活基本調査報告書(2008年発行)」など

イベント情報を見る

子どもに関するイベントを紹介。CRNが開催したイベントの実施報告もご覧いただけます。

これからも、多くの皆様にご利用いただけるよう、ユーザビリティの向上や内容の充実を図って参ります。今後ともCRNをよろしくお願ひ致します。

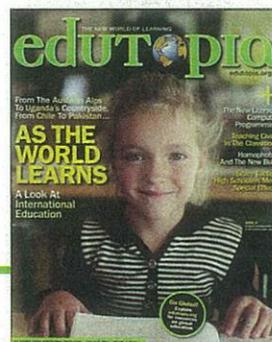
4 海外とのネットワーク強化!

CRNでは、異文化の子ども達との共通点・相違点を学ぶ合うことで、子ども学を世界的に発展させていけると考え、英語版・中国語版のサイトを中心に海外とのネットワークを強化しています。

中国語圏では、前述の東アジア「子ども学」交流プログラム発足により、中国の研究機関・研究者と共に子どもについて考える体制を作ることができました。

英語圏では、ジョージ・ルーカス教育財団(The George Lucas Educational Foundation; 略称GLEF)から発刊の雑誌「edutopia」と、サイト ([http://www.edutopia.org/global-](http://www.edutopia.org/global-education-japan-research-net)

[education-japan-research-net](http://www.edutopia.org/global-education-japan-research-net))で、世界中の子ども関連の活動を取り扱う記事の中で、日本の教育を代表してCRNならびに小林所長の「子ども学」での活動が紹介されました。



5 アクセストレポート

年間(2007年4月~2008年3月) ページ・ビュー数

- 日本語版 : 6,367,243pv
- 英語版 : 1,586,157pv
- 中国語版 : 702,878pv

CRNを取り巻く学会の動向

■ 日本子ども学会

<http://www.crn.or.jp/KODOMOGAKU>

第4回子ども学会

テーマ：「子ども・進化・脳科学

生命の科学と子ども学」

大会推進委員長：安藤寿康先生（慶應義塾大学）

期日：2007年9月15日、16日

場所：慶應義塾大学三田キャンパス

初日……………

基調講演1は長谷川真理子先生（総合研究大学院大学）による「進化から見たヒトの子どものユニークさ」。続けて榊原洋一先生（お茶の水女子大学）、佐倉統先生（東京大学）、安藤寿康先生らが長谷川真理子先生とともに、「ダーウィン先生を囲んで」というテーマで座談会を行いました。さらにシンポジウム1「進化の中の子ども」では、中村徳子先生（昭和女子大学）、デビット・スプレイグ先生（農業環境技術研究所）らが比較行動学的な視点から霊長類とヒトとの違いについて発表しました。



2日目……………

基調講演2は小泉英明先生（日立製作所役員待遇フェロー）による「脳科学から見た子どもの教育」。シンポジウム2「危機と共に生きる子どものための科学」では、北澤茂先生（順天堂大学）、神山潤先生（東京北社会保険病院）、長谷川奉延先生（慶應義塾大学）らが子どもたちの成育環境をめぐる問題点について討議を行いました。また、高橋孝雄先生（慶應義塾大学）が「遺伝と環境によって育まれる子どもの脳」について、安藤寿康先生が「ふたごが明かす脳と行動の形成過程」について講演を行いました。

日本子ども学会も日本赤ちゃん学会も、学際的に子どもの発達や成育環境について探求する学会です。全体を統合する基礎学問が設定されているわけではありませんが、現在は脳神経科学、遺伝学、進化生物学、霊長類学、ロボット工学など、生物学系や認知科学系の学問が、多様な学問分野をつなぐ役割を果たしています。従来人間科学には、文化的・社会的視点が欠けると言われましたが、現代人間科学は精神的な営みも含めて総合的にヒトの独自性の解明にあたっています。今後もそのような子ども研究の流れはますます

■ 日本赤ちゃん学会

<http://www.crn.or.jp/LABO/BABY>

第7回学術集会

テーマ：「赤ちゃん研究は赤ちゃんに何を返せるか」

大会長：志村洋子先生（埼玉大学）

期日：2007年6月30日、7月1日

場所：大宮ソニックシティ（埼玉県さいたま市）

初日……………

シンポジウム1では、林安紀子先生（東京学芸大学）がオーガナイザーとなり、「初期の言語・コミュニケーション発達をうながすもの—対乳児ことば、音楽—」というテーマで馬塚れい子先生（理化学研究所）、武居渡先生（金沢大学）、二藤宏美先生（ヤマハ音楽研究所）らが、乳幼児のコミュニケーション活動などについて論じました。また、教育講演として、松沢哲郎先生（京都大学霊長類研究所）が「チンパンジー研究からヒト赤ちゃん研究へ」というタイトルで発表を行いました。

シンポジウム2では、根ヶ山光一先生（早稲田大学）がオーガナイザーとなり、「脳研究は赤ちゃんに何をもたらすか」というテーマで、多賀殿太郎先生（東京大学）、鈴木健太郎先生（札幌学院大学）、近藤清美先生（北海道医療大学）、小山敦司先生（赤ちゃんとママ社）らが討議を行いました。

2日目……………

シンポジウム3「赤ちゃんが乳児保育に求めているもの」では、榊原洋一先生（お茶の水女子大学）、松永静子先生（新井保育園）の二人がオーガナイザーとなり、汐見稔幸先生（白梅学園大学）、大日向雅美先生（恵泉女学園大学）、雲雀信子先生（NPO法人子育てサポート・チャオ代表）らが保育の現状について議論しました。

そのほか、日本赤ちゃん学会は、カナダ・トロント大学のサンドラ・トレハブ先生（Sandra Trehub）フロリダ州立大学のジェーン・スタンレー先生（Jayne Standley）を招いて、「赤ちゃん音楽」をテーマに、「赤ちゃん学国際シンポジウム」「公開シンポジウム」などを開催しています。

加速していくと思われれます。

その一方で、子どもというのは研究対象というよりも、私たち大人とともに生きて、未来の社会を形作るパートナーであります。子どもたちの日常をどのように支援していくのか、子どもの基礎研究とともに、成育環境の向上につながる活動の必要性への自覚も高まっています。基礎的な子ども研究と成育環境の支援、その両輪のもとに今後の両学会の活動は展開されていくと思われれます。

※CRNは両学会HPの運営をサポートしています。

日本語版

<http://www.crn.or.jp/>

CRN日本語版は、13年間にわたるCRNの研究活動の成果、寄せられた論文やレポート、研究機関とのネットワーク、読者からの意見などが詰まったサイトです。子どもに関して、これほど学際的、国際的な知見がそろっているサイトは、ほかにないユニークな存在です。情報はすべて無料で提供しておりますので、ぜひ一度、覗いてみてください。

CRNお勧めポイント

名立たる専門家による講演、寄稿論文・レポートを公開しています！

大江健三郎 (作家・ノーベル文学賞受賞者)
 【講演】「子ども－人間の未来」のモデル
 (講演動画) [http://www.crn.or.jp/LIBRARY/](http://www.crn.or.jp/LIBRARY/EVENT/sympo07/oe.html)
 EVENT/sympo07/oe.html
 (講演全文) [http://www.crn.or.jp/LIBRARY/](http://www.crn.or.jp/LIBRARY/EVENT/sympo07/lecture/oe/index.html)
 EVENT/sympo07/lecture/oe/index.html



CRN設立10周年記念のシンポジウムにて、特別講演をしていただきました。ご自身が出会ってきた忘れがたい言葉のご紹介、またご家族との生活の中で経験してきたことを小説「二百年の子供」に織り込まれたこと、そして最後に、子どもの未来、人間の未来に対するメッセージを語っていただきました。

石井威望 (東京大学名誉教授)

【レポート】少子化社会におけるIT技術
 (レポート全文) [http://www2.crn.or.jp/blog/](http://www2.crn.or.jp/blog/report/02/post_47.html)
 report/02/post_47.html

日本のマルチメディアの第一人者が、IT技術の普及が影響を及ぼす、少子化時代の育児や教育について述べていただきました。

そのほか多数、専門家の方々による貴重なお話を公開しており必見です。

耳寄りな情報を、CRN通信(メルマガ)でお届けします！

月1回(不定期)のペースで、子どもに関する耳よりな情報を「CRN通信」としてお届けしています。講演会や勉強会の情報から、CRNの記事紹介、プレゼントがもらえるアンケートなど、読者にとってお得になる情報をお届けしています。ぜひご登録ください。

ぜひ、

CRN 子どもは未来である

で検索してみてください！

定期(隔週)更新で、新鮮な情報をお届けします！

CRN日本語版は、金曜日(隔週)が更新日。1回の更新で、5~6つの記事を掲載しています。また定期更新日以外にも、興味深い情報は、適宜トピックスで提供しています。いつ訪れていただいても、新鮮な情報をご覧ください。

13年にわたるアーカイブがあり、多岐にわたるテーマを研究できます！

13年目を迎えたCRNでは、取り扱ったテーマ、ご協力くださった研究者は、数え切れないほどです。そのすべてをアーカイブとして無料で公開しております。子どもに関することなら、これまでの蓄積を活用して、何らかのヒントを提供できると思っております。知りたい時、困った時、CRNにアクセスしてみてください。





CRNお勧め
コンテンツ

Monthly Articles on Children

CRNスタッフや研究者が交代で担当するコーナー。最近論議を呼んでいる問題や講演会の報告など、子どもに関する話題を様々な視点から取り上げています。

Data

ベネッセコーポレーションによる調査データを紹介しています。「妊娠出産のアンケート」や「教育に関する6カ国比較」など、子どもに関する最新の情報が得られます。

Research Papers

各国の研究者による専門的な論文が一般の方にも気軽にお読みいただけるページです。

Teens' Photo Project

子ども達自身による写真を通して、調査や研究レポートからは見えてこない子ども達の姿をお届けします。

メルマガ(英文)のご登録

月に1度発行するメルマガで、好評配信中です。サイトの更新情報やCRN活動情報をタイムリーにお届けしています。

CRN中国語版サイトは中国国内の育児・保育・教育に関心のある方向けに作られています。日本や海外情報の紹介、中国独自の取り組み、CRNの活動などを紹介しています。

CRNお勧め
コンテンツ

予防接種

中国では、母子手帳のかわりに、予防接種手帳があります。ワクチンの種類が多い上、任意のものも多く、親にとって悩みの種です。このコーナーでは、予防接種に関する基礎知識や最新情報を定期更新しています。

宝宝健康成长

子どもが健やかに成長していくための親の悩み解決コーナー。病気や栄養のことを中心に解説しています。

学前教育論文

中国学前教育研究会の機関誌に掲載されているレベルの高い学術論文を数多く掲載します。このコーナーを読むだけでも、中国の幼児教育の主な動きが分かります。

海外の幼児教育紹介

日本を中心に、海外の幼児教育情報を紹介しています。

メルマガ(中文)のご登録

隔週に発行するメルマガで、好評配信中です。サイトの更新情報やCRN活動情報をタイムリーにお届けしています。



今後の活動予定

1 東アジア子ども学交流プログラム 第3回 中国実施

- ・日程: 2008年11月
- ・場所: 中国 浙江師範大学杭州幼児師範学院

2008年4月に開催した第2回のシンポジウムでは、子どもの成長・発達と生活環境について、非常に興味深い議論になりましたが、秋には、さらにそれを掘り下げていく所存です。

詳細が決まりましたら、CRNホームページにて掲載いたします。

2 日・英・中 3サイト それぞれ隔週で定例更新

各サイトとも、2週間に1回の更新で、常に新鮮な情報をご提供いたします。

また、月1回の頻度で、特別な情報をお届けするメルマガを発行しております。ぜひご登録ください。

(登録無料)

アンケートにご協力ください!

本CRNニュースレターについて、読後WEBアンケートを実施しております。

CRNのTOPページ (<http://www.crn.or.jp>) から、アンケートシステムでお答えください。

なお、(2008年9月30日)までにご回答頂いた方の中から、抽選で100名様に図書カード500円分を謹呈させていただきます。ご協力をよろしくお願い致します。

論文・レポート・エッセイ 投稿募集中!

CRNウェブサイトにて、論文・レポート・エッセイを投稿しただき方を募集しています。査読規準を満たしたものは、掲載させていただきます。ご興味のある方は、CRNのTOPページ (<http://www.crn.or.jp>)の「論文・レポートを投稿しませんか?」にご登録ください。こちらから、投稿の方法についてご連絡差し上げます。皆さまからのご連絡を、お待ちしております。

これまでの活動

- 1996年・日本語・英語サイトオープン
・シンポジウム「マルチメディア社会の子ども達」
- 1997年・シンポジウム「中高生のデジタルな友達づくり」
・ジェーン・グドール博士講演会
「チンパンジーの世界と自然のお話」
・ジェイ・ベルスキー博士講演会
「子どもの発達と家族研究」
- 1998年・国際シンポジウム
「メディアは子どもをどう育てるのか?」
・ジェーン・グドール博士講演会
「チンパンジーと自然のお話」
・CRNサイト「WEBデザインアワード」銀賞受賞
- 1999年・公開座談会
「学級崩壊はしついでとめられるのか?」
・プレイショッ「CRN国際プレイショッ99」
- 2000年・公開座談会「『学校』と『家庭』を結ぶもの」
・プレイショッ「Feel the Media」
・国際シンポジウム「21世紀の子育てを考える」
- 2001年・プレイショッ「ふゆものがたり
～プレイフルストーリーをつくろう」など
・研究拠点「ながやまチーきち」開設(～2002年)
・音のワークショップ(～2003年)
- 2002年・CRN 実践保育研修会
「保育の質を考える?心とからだを育む視点から」
・プレイショッ「カラフル王国であそぼう」など
・「子ども学研究会」発足(～2003年)
- 2003年・「日本子ども学会」設立
・「メディアキッズワークショップ」(～2005年)
- 2004年・「第1回子ども学会議」(「日本子ども学会」学術集会)
・チャイルド・サイエンス懸賞エッセイ スタート
・中国の子ども研究機関を訪問(中国 北京)
- 2005年・中国語サイトオープン
・「第2回子ども学会議」(「日本子ども学会」学術集会)
・宋慶齡基金会の招聘を受け小林所長が講演
(中国 上海)
- 2006年・子どもの健康に関する学会にて
「食育」をテーマに分科会を開催(中国 長春)
・「第3回子ども学会議」(「日本子ども学会」学術集会)
・中国政府主催のシンポジウムにて小林所長が講演
(中国 上海)
- 2007年・CRN設立10周年記念国際シンポジウム
「『子ども学』からみた少子化社会」
・「第4回子ども学会議」(「日本子ども学会」学術集会)
・第1回 東アジア子ども学交流プログラム開幕式
(中国 上海)
・第1回 東アジア子ども学交流プログラム集中講義・
幼児教育展覧会開催(中国 長沙)
- 2008年・日本語サイトリニューアルオープン
・第2回 東アジア子ども学交流プログラム集中講義
(日本 東京)

<発行日> 2008/07/31

<発行> チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)
〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105
神保町三井ビル16F
(株)ベネッセコーポレーション 内
TEL: 03-3295-0293 FAX: 03-5577-8420

<編集人> 後藤 憲子

<編集スタッフ> 松本 留奈 劉 愛萍 岩崎 菜穂子
木下 真 (木下編集事務所)

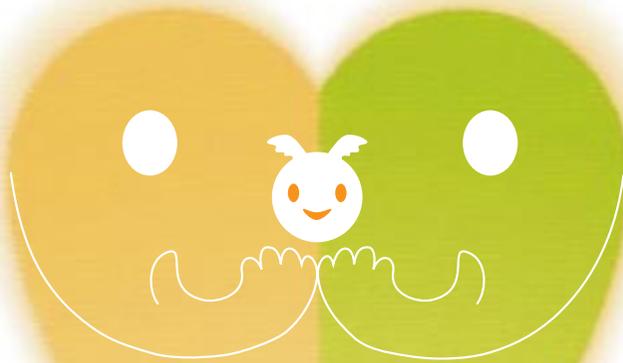
<デザイン> 古関 敦子 (スフィア)



子育てのスタイルは 発達にどう影響 するのか

乳幼児1364人を
7年間にわたり追跡調査
米国NICHD

CRNは
「社会による子育て」を
研究しています



S Y M P O S I U M

R E P O R T



CRN国際シンポジウム2000
21世紀の子育てを考える
の
報告





米国 NICHD 早期保育研究の 成果について

サラ・フリードマン(NICHD - 国立小児保健・人間発達研究所)

I はじめに

このたび、こうして皆様にお話しすることができ、大変嬉しく思っております。また、日本の保育問題に関心のある方々と意見を交わし、会場の皆様からも教わる機会をいただけることを、とても楽しみにしております。本日は、米国で行われました保育研究について報告をさせていただきます。米国と日本の事情は異なりますので、私の発表についても批判的にお聞きいただけたらと思います。日本の家庭や保育者にも当てはまる研究結果とそうでないものがあるということをご理解いただければと考えております。

本日、私は、NICHD 乳幼児保育研究ネットワークを代表してまいりました。このネットワークは全米 24 の病院で 1991 年に生まれた、さまざまな背景をもつ 1364 人の子どもを長期的に調査している研究者チームです。この研究は子どもの発達に及ぼす保育の影響を評価するために計画されたもので、多くのデータを収集したことにより、今回、ご報告できることとなった次第です。研究調査員は 10 カ所のデータ収集地ならびに NICHD に関連している、いずれも著名な発達心理学者であり、さまざまな概念的、方法論的な専門知識が集結されています。

発表を始めるにあたり、まず最初に、保育を受けている子どもたちには家族がいることを思い起こしていただきたいと思ひます。保

育を論ずる人々は、時としてこれを忘れがちです。このことを念頭に置く必要があります。

すなわち

- ・ 子どもに保育を受けさせることは、育児の一形態である
- ・ 家族の特徴や育児から、母親と保育を受けている子どもの関係を予知することができる
- ・ 家族の特徴や育児から、保育を受けている子どもの認知的並びに社会的発達を予知することができる

のです。なお、「家族の特徴や育児」と一口に申し上げましたが、この二つは関連はありますが、同じではありません。家族の特徴には所得や婚姻状況、母親の学歴などの人口統計学的特徴と、母親の心理的充足度や態度などの心理学的特徴が含まれます。また、育児というのは、子育て環境の選択、母親のセンシティブリティ*や対応、あるいは認知的刺激を与えるといった子育てに伴う行動やプロセスをさします。

* 子どもの心を読み取る力、細やかな心や感受性のこと

II 親が保育を選択する

子どもに保育を受けさせることは、育児の一形態ととらえることができます。なぜならば、親が保育を選択するからです。親に限りない選択肢が与えられているわけではありませんが、子どもが何歳になったら保育を受けさせる

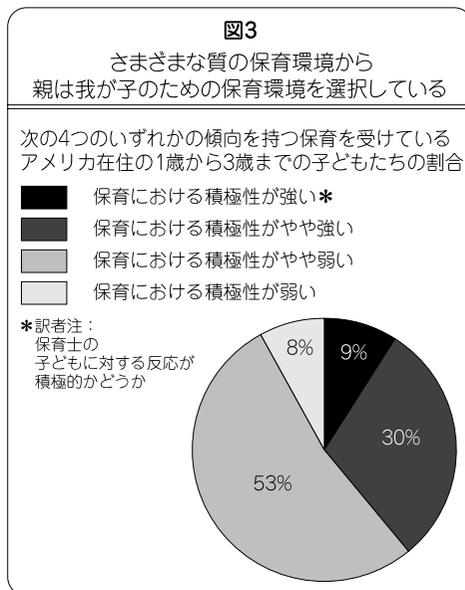
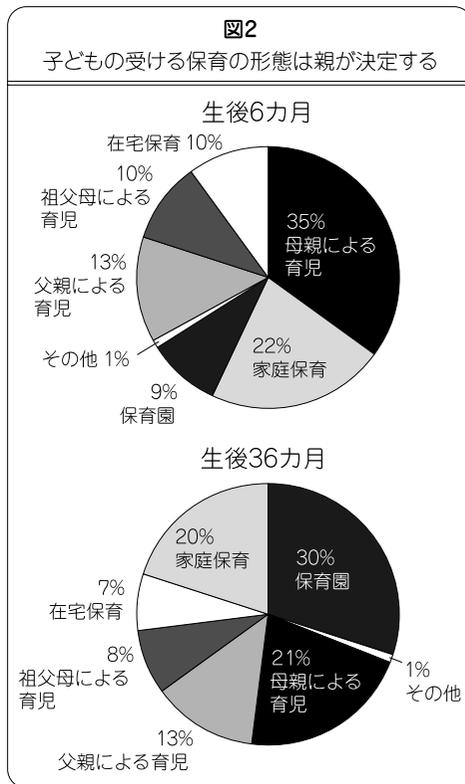
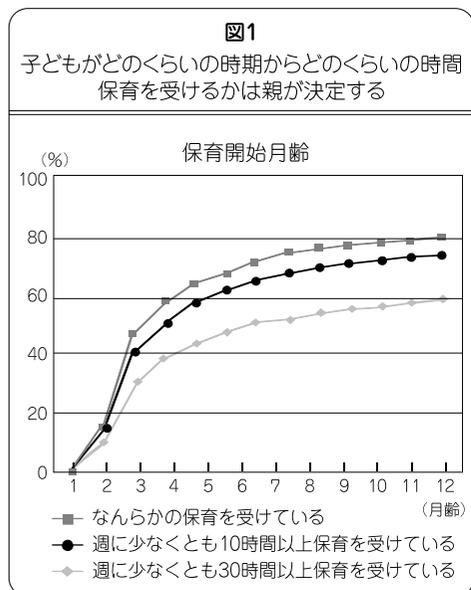
のか、何時間受けさせるのかを決めるのは両親です。

図1をご覧ください。NICHDの研究結果によりますと、6カ月児のおよそ50%が週30時間以上の保育を受けており、60%以上の子どもたちが週10時間以上の保育を受けています。この比率は、月齢を重ねるにつれて上昇します。生後12カ月までに、子どもの80%が何らかの形で、母親以外による保育を受けています。

図2は、さまざまな育児形態があることを示しています。父親や祖父母による育児、親類以外による在宅保育、家庭保育、保育園での保育などがあり、両親はさまざまな質の育児形態のなかから選択を行います。しかし、質の高い保育を利用できる可能性は限られています。米国の保育の質については、NICHDが母親の学歴、保育の種類などによって等級別に分類した保育の質の観察パラメーターを、1998年の全国家庭教育調査の対象となった米国の家族分布に適用し、測定を行いました。

図3でおわかりいただけますように、保育

士の子どもに対する積極性が強い、つまり非常に高い質の保育を受けている子どもたちの比率は、保育全体のわずか9%です。やや



質の高い保育を受けているのは 30 %。そして、あまり質の高くない保育を受けているのが 8 %となっています。

子どもの保育を選ぶのは親ですから、家庭の人口統計学的・社会心理学的な特徴により、子どもが受ける保育の特徴が予知できるといってもよいでしょう。日本社会における家族的特徴は米国とは異なるかもしれませんが、ここでは米国の研究でわかった家庭の特徴についてお話しします。

表 1 をご覧ください。生後 15 カ月の保育を分析すると、保育開始年齢、保育時間、母親以外による保育の種類や質などに最も深く関連しているのは経済的要因でした。また、母親の人間性や子育てをしながら就業することに関する考え方も、家族が母親以外の保育を選択する要因でした。生後 3 カ月から 5 カ月で母親以外による保育を受け始めた子どもの母親は、外交性、協調性において最も高い得点を得ており、母親の就業が子どもによりよい利益をもたらすと信じていました。母親以外による保育は、家族における子どもの数が少数、母親の低学歴、母親が高所得、家族

の低所得、長い就業時間、また、母親の就業が利点をもたらすと考えている場合に、より強い相関関係がみられました。

保育の種類は家族の大きさ、母親の学歴、家族構成、経済状態、母親の就業に伴うリスクについての信念に関連していました。

保育の質は、保育形態により異なっていました。在宅保育や家庭保育では、家族の所得と保育の質は正の相関関係にあります。また、保育園の保育では低所得層家庭と高所得層家庭の子どもは中所得層家庭の子どもに比べて、より質の高い保育を受けていました。以上のことから、家族の特徴が保育の選択に関連していることがわかりました。

これから私が申し上げることは、皆様にも身近な話題だと思えます。米国では、保育が家族との交流に基づく子どもの健やかな発達を阻害しているのではないかということが人々の関心事となっています。より具体的に言えば、母親や父親は次のような問いへの回答を求めているのです。

1. 乳幼児保育は、子どもの母親に対する

表1
母親以外による保育と関連する因子が可変要因に与える影響

		開始年齢	保育時間	保育の種類	保育の質
家族の特徴	子どもの人種・民族		*		*
	母親の学歴		-	*	
	同居者の有無			*	NA
経済的因子	母親の所得	*	+	*	NA
	母親以外の所得	*	-	*	NA
	所得／生活費	NA	NA	NA	+1
社会心理的因子	母親の性格と人間性	*		NA	
母親の仕事などに対する考え方ととる行動	仕事することの利点	-	+	*	NA
	仕事することの不利な点		-		NA
	権威的でない子育てに関する信念		+		+1

注：「+」はプラスの関係を示している。「-」はマイナスの関係を示している。「*」は関係が一定でない。「1」はある場合に關してのみあてはまることを示す。「NA」はその組み合わせ、または可変要因が分析されなかったことを示している。

安定した愛着もしくは母子間の相互作用に有害な影響をもたらすのではないか？

2. 保育が子どもの認知発達、社会的発達、社会的能力並びに社会協調性について直接、間接にもたらす影響は何か？
3. 子どもに保育を受けさせる家庭は、子どもの発達に及ぼす影響力が少ないのではないか？

これらの各質問について、NICHD 乳幼児保育研究の結果からお答えしてまいります。

資料 1 は、家族の所得ならびに母親の就業が子どもの発達に与える影響を与えるという母親の信念を考慮した上で分析をしています。子どもが生後 15 カ月の時に行ったストレンジ・シチュエーションテスト(見知らぬ人と出会った反応をみて母親の愛着を評価する方法)で、母親の愛着安定性が測定されています。

これを見ると、母親の心理的適応性が愛着の安定性に関係していることがわかります。母親の心理的適応性が高いほど、子どもの母親に対する愛着安定性は高くなります。母親の子どもへの心理的適応性は、母親の不安感、落ち込み、社会性、楽しむ心、楽天性、協調性、信頼感、有用性、寛大性を総合して測定されました。

母親のセンシティブリティもまた愛着安定性に関係していますが、これは測定の尺度により

ます。コールドウェル & ブラッドレーの H.O.M.E.(面接と観察を組み合わせる構築した半体系的な方法で、家庭で行われるテスト)を用いてセンシティブリティを測定した場合、母親の乳幼児に対するセンシティブリティや反応が強いほど、愛着が安定する可能性が高くなるということがわかりました。しかし、母親と子どもの遊びを通じて測定したセンシティブリティについては、有意な影響は見られませんでした。

保育の家族への影響をお話したいと思っておりますのでまず愛着における保育の影響について見てみましょう。資料 2 から、保育の質の二つの尺度として、積極性のある保育を受ける頻度と積極性の強さ別にみた保育、そして 1 週間の保育時間、保育開始年齢は愛着の安定性に有意な影響を与えていないことがわかります。この分析では、家族の特徴、母親の態度、親による育児を考慮しています。

次に、保育により子どもの母親に対する愛着を予知できるかどうかを見てみましょう。母親のセンシティブリティが低い場合や週 10 時間以上の質の低い保育、生後 15 カ月以内に 2 回以上も保育形態を変えるとといったことが、愛着不安定性の確率を高めています(表 2)。たとえば、母親のセンシティブリティと保育の質の双方で点数の低かった子どもたちのうち、愛着安定性の高い子どもの割合は 44% ~ 51% でした。その他の子どもたちでは、愛着

資料1 愛着の安定性／不安定性の解析 母親の影響	
心理的な適応性*	安定 > 不安定
センシティブリティ* - 遊び	(有意な影響は見られない)
センシティブリティ - 家庭**	安定 > 不安定
*p<.05 **p<.01 ※赤ちゃんの心を読み取る力。Sensitivity.	

資料2 愛着の安定性／不安定性の解析 保育の影響	
積極性のある保育を受ける頻度	有意な影響は見られない
積極性の強さ別にみた保育*	有意な影響は見られない
保育の量(時間)	有意な影響は見られない
開始年齢(生後何カ月)	有意な影響は見られない
保育が安定した年齢	有意な影響は見られない
※訳者注：保育者の乳児に反応する積極性を段階別に分けてみる	

の安定性を示した子どもの平均値は 62 % でした。

なお、母親のセンシティブリティや保育の質を測る際に何を基準にしていたのかをご説明しておきます。母親のセンシティブリティを測る 10 の指標を、資料 3 にあげました。また、保育形態については、保育者の子どもに対するセンシティブリティ・データを収集いたしました。これは、保育者が保育室全体でどのように行動するかではなく、対象の子どもに対してどのように行動するかをみるというものです。対象としたのは生後 6 カ月、15 カ月、24 カ月、36 カ月の子どもたちで、1 セッション 44 分の授業、2 セッションからデータを収集しました。二つの授業は 1 週間程度の間隔をあげ、各セッションでは、毎分ごとの保育者の活動を観察し、子どもとの相互作用の評価も含めました。資料 4 は、毎分ごとに測定する行動頻度の尺度を示しており、資料 5 は評価です。非常に似通った行動ですが、同一のデータ収集者により異なる情報が収集されています。

次に、母子間の相互作用について述べたいと思います。以前、報道関係者に研究結果を話していて気がついたのですが、一般的には愛着(attachment)と母子間の相互作用(mother-child interaction)の区別がされていないようです。これらは、別々に測定する二つの異なる概念です。愛着というのは、子

どもが母親に対して抱く安心感や信頼といったものです。一方、母子間の相互作用は、母親が子どもの心を読み取り子どもに反応することや、子どもの母親への思い入れといったものです。私たちは生後 6 カ月、15 カ月、24 カ月、36 カ月の子どもたちについて、定型化された母子の遊びを観察したものをビデオテープに 15 分間収録し、母子間の相互作用の質を評価しました。

表 3 でご覧いただけますように、家計所得、母親の学歴、夫婦・パートナー関係といった要素は、いずれも母子間の遊びにおける母親

資料3

母親のセンシティブリティ
(子どもの心を読み取る力)を測る指標

1. 子どもの情動を読み取る
2. 子どもの話や活動に反応する
3. 子どもの活動を促すが、過度に管理はしない
4. 子どもの興味を反映する活動をタイミングよく促す
5. 子どもが十分に元気づけられていない、過度に興奮している、疲れているようなときには、ペースを変える
6. 子どもの興味、喜びを理解する
7. 積極的な情動の共有
8. 適切な刺激を与え、適度な強さの幅と種類の活動を提供する
9. 悪い行為の内容に反応し、かつ子どもの理解能力、叱責から得られる便益に見合った、タイミングをふまえたしつけを考慮する
10. 素直さや自主性を扱う上で、柔軟に対応:素直でないことに過度に反応することなく、依存心を許容しつつ自主性を支える

表2

愛着の安定性／不安定性の解析
母親と保育との特に重要な関連性

	積極性のある保育 を受ける頻度	積極性のある 保育の段階	保育の量 (時間)	開始年齢 (生後何カ月)	保育開始
心理的適応性					
センシティブティ-遊び	*	*			*
センシティブティ-家庭		*	*		
*p<.05					

のセンシティブリティに対し、統計学的に有意なものとなっていました。つまり、母親のこれらの要素の点数が高いほど、子どもに対するセンシティブリティが高くなっていったのです。逆に、母親の気分的な落ち込みや子どもから離れることに対する不安感が強いほど、子どもと遊んでいる時のセンシティブリティは低くなっていました。母親の子どもと積極的に関わる度合いについては家計所得、母親の学歴、母親の気分的な落ち込み、子どもと離れることへの不安感が関係しています。

また、保育の質は母子間の相互作用における母親のセンシティブリティと正の相関関係が

ありました。しかし、保育時間が長くなるほど、母親のセンシティブリティは低下し、子どもとの関わりが少なくなります。注目したいのは、この保育時間と母親のセンシティブリティの関連は生後 6 カ月、15 カ月、24 カ月、36 カ月のいずれの時点においても明らかだったということです。影響の程度は軽微もしくは中程度で、母親の気分的な落ち込みや子どもの気質といったものと同程度、すなわち、3 分の 1 程度の影響がみられました。

ここまで、家族の特徴が生後 15 カ月時の子どもの愛着、また、生後 3 年間の母子間の相互作用に関連していることを見てまいりました。家族の影響は、保育の影響よりも大きかったわけです。

資料4 ORCE行動測定尺度	
頻度:	
■ 積極的情動の共有	
■ 積極的なスキンシップ	
■ 発声や子どもの話に答える	
■ 子どもへ積極的に話しかける	
■ 子どもへ問いかけをする	
■ その他子どもに話しかける	
■ 認知発達の刺激/学習能力を身につけさせる	
■ 行動を促す	
■ お互いに交流のやり取りをする	
■ 否定的/拘束的行為(またはその逆)	
■ 子どもに否定的態度で話しかける(またはその逆)	
■ 子どもの観察/子どもにかまけない/変化(またはその逆)	

資料5 積極性のある保育のORCE評価	
44分間を1サイクルとし、評価は各サイクル終了時ごとに行われる	
■ 自由なコミュニケーションに対するセンシティブリティ/反応速度	
■ 刺激	
■ 積極的な関心	
■ 無関心・放任	
■ 平坦な情動	
■ 干渉(36カ月目)	
■ 探究心の育成(36カ月目)	
構成要素は、保育の全体的な質を評価するための格付けとなっている	

	予知因子	サンプル	母親のセンシティブリティ	子どもと積極的に関わる度合い
家族	所得	全体	** (+)	* (+)
	母親の学歴	〃	*** (+)	** (+)
	母親の気分的な落ち込み	〃	* (-)	* (-)
	夫婦関係	〃	*** (+)	n.s.
	子どもからの分離による不安	〃	** (-)	* (-)
保育	時間	全体	** (-)	** (-)
	質	観察例	* (+)	n.s.

*=p<.05 **=p<.01 ***=p<.001

それでは、親たちが抱く 2 番目の問いについてです。子どもの認知発達、社会的能力ならびに社会協調性について、保育が直接、間接にもたらす影響はなんでしょうか？ 私たちは、生後 3 年間に受ける保育の経験と子どもの認知的ならびに言語的発達、就学レディネス、問題行動、素直さ、友達関係の関連について分析を行いました。

表 4 は認知発達の結果を示しています。生後 24 カ月および 36 カ月時における発達結果は、認知ならびに言語的領域に認められました。また、表 5 は社会的分析です。結果は、保育時の非従順性、保育者の報告による問

題行動について関連が見られました。子どもの社会的適応性、問題行動についての母親からの報告は表 5 には示されていませんが、分析結果には含まれています。

分析でわかったのは、認知的ならびに社会的発達のいずれについても、家族の特徴が一貫して子どもの発達に関係していたということです。一方、保育の回数などの保育の特徴と子どもの発達結果はそれほど合っていないでした。統計上有意な保育の特徴による影響があったとしても、それらは家族の特徴より度合いが小さいのです。つまり、保育の特徴よりも家族の特徴の方が、子どもの発達結

表4

生後24カ月と36カ月における家族と保育に関する予知因子と認知発達との関係

予知因子	生後24カ月			生後36カ月		
	MDI※2	語彙に関するCDI※3	センテンスに関するCDI	就学レディネス (by Bracken)	言語表現 (by Reynell)	語彙聴取力 (by Reynell)
家族	母のPPVT※1	* (+)		* (+)	* (+)	
	所得	* (+)				* (+)
	家庭の質	* (+)	* (+)		* (+)	* (+)
	妊娠時の胎児への刺激	* (+)			* (+)	* (+)
保育の質	保育園に預けている回数	* (+)	* (+)	* (+)	* (+)	* (+)
	家庭保育の回数	* (+)				* (+)
	モデル1: 積極性のある保育	* (+)		* (+)	* (+)	* (+)
	モデル2: 言語的な刺激	* (+)	* (+)	* (+)		* (+)

*=p<.05 **=p<.01 ***=p<.001

※1 PPVT: Peabody Picture Vocabulary Test
 ※2 MDI: Mental Development Index
 ※3 CDI: Communicative Development Inventory

表5

生後24カ月と36カ月における家族と保育に関する予知因子と、自己統制力、従順さ、問題行動との関係

予知因子	保育時に従順でない		問題行動 (保育者の報告による)	
	生後24カ月	生後36カ月	生後24カ月	生後36カ月
家族	所得			* (-)
	母親の適応性		* (-)	* (-)
	マザーリング		** (-)	*** (-)
保育	量		** (+)	
	開始年齢		* (+)	
	質		* (-)	** (-)
	保育の条件が安定している	* (+)		
グループケアの条件が安定している	** (-)			** (-)

*=p<.05 **=p<.01 ***=p<.001

果をよりよく説明していたということです。

それでは、親たちの3番目の問いかけに進みます。3番目の疑問は、母親が子育てをしている場合と長時間保育を受けさせている場合とで、子どもの発達はどう違うのかということです。この問いかけに対し、二つの子どもたちのグループを比較しました。母親がほとんど全面的に世話をしている子どもと、長時間保育を受けている子どものグループです。

母親がほとんど全面的に世話をしている子どもとは保育時間が平均週10時間未満、長時間保育を受けている子どもとは保育時間が週30時間を超えるものとしました。24カ月児については、母親による全面的育児は164名、保育を受けている者が184名。また、36カ月児では母親による全面的育児は127名、長時間保育を受けている者が147名でした。なお、家族の特徴については人口統計学的特徴、社会心理学的特徴、人間関係の三つを取り上げました。資料6は、家族の特徴を示しています。子どもの発達度合いについては、生後24カ月、36カ月時に評価を行い、認知的・社会的発達の領域を検討しました。また、資料7には、生後24カ月および36カ月時における子どもの特徴を示しました。

私たちは二つのグループについて、家族の

特徴と子どもの発達結果についての相関関係が異なっているかどうかを調べ、その相違が偶然によるものではないことを結論づけようとしてきました。結果は、生後24カ月、36カ月いずれの月齢時においても、家族の特徴と子どもの発達結果のマトリックスに十分な相違は見られませんでした。

III まとめ

これまでの発表を要約させていただきま。子どもにいつから保育を受けさせるかについてや週何時間くらい受けさせるか、また、保育の種類や質についての決定は家族が行います。これらの決定を導くのはおもに経済的な要因ですが、母親の心理的特徴も影響してきます。

表6に本研究の第一段階の研究成果をまとめました。家族の特徴や親による育児は、乳幼児の母親に対する愛着や母子関係、子どもの社会的能力、問題行動、言語的発達および就学レディネスと重要な関連性があります。家族の特徴ならびに親による育児は子どもの発達結果に一貫して関連しますが、保育の特徴は必ずしもすべてとは関連しませんでした。さらに、家族の特徴や親の育児による影響の方が、保育の影響よりも大きくなってい

資料6	
母親が全面的に世話をしている子どもと、長時間保育を受けている子どもへ家族の与える影響を比較するための、家族に関する可変要因	
人口統計学	夫婦関係 所得／生活費
人間性／行動	性格 気分の落ち込み 仕事することの利点 権威的でない
マザーリング ／親子関係	遊びにおけるセンシティブティ 家族への積極的関与 愛着

資料7 子どもの示す特徴	
生後24カ月	精神的発達 (Revised Bayley) 社会的能力 (Adaptive Social Behavior Inventory) 問題行動 (Child Behavior Checklist)
生後36カ月	就学レディネス (Bracken) 言語表現 (Reynell) 聞き取りのための語彙 (Reynell) 社会的能力 (Adaptive Social Behavior Inventory) 問題行動 (Child Behavior Checklist)

まず、最後に、家族の人口統計学的特徴、社会心理学的特徴、人間関係といった特徴において、母親がほとんど全面的に世話をしている子どもと長時間保育を受けている子どもとの間に大きな差異は見られませんでした。

IV 結論

以上の研究結果から、子どもは乳幼児段階においては、母親による全面的な育児を受けているか、保育を受けているかにかかわらず、家族の特徴や母親の行動、母性の属性が子どもの認知的発達ならびに社会感情の発達に重要であることがわかります。また、保育の経験、とくに保育の質は、度合いは小さいものの子どもの発達に一貫して影響をもたらします。さらに、母子間の相互作用が影響することを裏付けるものがいくつかみられます。たとえば、母親に子どもの心を読み取る力が充分に不足、子どもも質の低い保育を受けている場合、愛着の不安定性に関連している可能性が高いといえます。結論としては、(統計上の数字には影響しない)例外的データはありましたが、母子相互作用に関して、母親以外による長時間保育で家族の影響が減少する(変化する)ことはありません。

質疑応答

質問: 米国では父親がよく育児をすると聞きますが、父親による育児を受けた子どもたちに関する情報や統計はありますか？

フリードマン博士: 大変よいご質問で、この点に関する情報を出せたらと思っています。ちょうど『家族心理学ジャーナル』6月号で、子育てにおける父親の関わりや遊びのなかでの父親の子どもに対するセンシティブリティについての論文を発表したばかりですが、父親の関わりもしくはセンシティブリティと子どもの発達の間を研究するにはまだいたっておりません。

質問: 母親のセンシティブリティが子どもの発達に大きく影響するとのことでしたが、母親のセンシティブリティを決定する要因はなんなのでしょうか？

フリードマン博士: ご質問に直接お答えする前に申し上げておきたいのですが、私たちは、母親のセンシティブリティが子どもの発達結果のすべての要因とは見ていません。概念的に理由付けができる場合のみ、母親のセンシティブ

表6

第一段階における研究成果
(家族及び子どもの変数をすべて考慮したうえでの結果)

	愛着	親子関係	保育時に従順でない	問題行動	認知発達と就学レディネス	言語発達
家族	+	+	+	+	+	+
保育の質	!	!		+	+	+
保育の量	!	!		!		
保育の種類			!	!	+	+
保育の安定性*	!		!			

* 安定性とは保育の施設や人を変えないこと + 一貫した影響 ! 何らかの条件下での影響

ティと子どもの発達の間接的な関係のみならず、具体的には、母親のセンシティブリティと乳幼児の母親への愛着、母親のセンシティブリティと子どもの依存心、社会的能力、問題行動の関係を調べたわけですが、これは、母親による認知的刺激の方が、より適切な要因であると考えたからです。

ご質問への直接的なお答えですが、私たちは母親のセンシティブリティを定義づける観察システムを、非常に注意しながら使っていました。発表のなかで、母子間の相互作用を評価する際に見る母親の行動を示す資料をご紹介します(資料4)。また、コールドウェル&ブラッドレーのH.O.M.E.によるセンシティブリティの評価も行いました(資料1)。ただ、現在までのところ、母親のセンシティブリティを決定する要因についての研究は行っておりません。

思うに、子どもの要求に敏感に反応するかどうかを決める母親の意識、ならびに子どもの発達における母親のセンシティブリティが重要だという母親の認識、この二つが、女性と幼い子どもたちとの相互作用におけるセンシティブリティを決定する上で大切な要素だと思います。

質問: 小児科医をしております。私は働く母親たちの子どもが結婚して子どもを持った時、どんな子育てをするのか心配をしています。母親が子どもの時に十分な愛情を受けていなければ、自分に子どもが生まれた時に不安を抱くのではないのでしょうか。こうした世代間の愛情の引き継ぎについての情報はお持ちですか。

フリードマン博士: 母親がフルタイム、あるいはパートで仕事に就いている場合、子どもの

心を十分に読み取ることができない、もしくはセンシティブリティを表現する十分な機会がないのではないかと。そして、母親から十分に心を読み取ってもらえなかった子が大きくなって子どもを産んだ時、幼児の心を読み取るという知識がないまま親になってしまうのではないかと心配されているのです。

私たちの研究では、対象児童のほとんどが保育を受けていました。母親は子どもとのふれあいの時々において、センシティブリティを示しています。本日お話ししたように、母親のセンシティブリティと子どもの発達には関係があることがわかりました。母親のセンシティブリティが高いほど、子どもの愛着安定性が高まります。センシティブリティが強いほど、子どもの社会的能力は高まり、問題行動を示す可能性が低くなるのです。ですから、保育を受けている子どもたちの母親も、子どもたちにセンシティブリティを示すことはできるわけです。

しかし、これらの母親が毎日、どの程度の時間、子どもたちの心を読み取ろうとして関わりをもっているのかはわかりません。また、センシティブリティを次の世代に引き継ぐのに、どの程度のセンシティブリティによる相互作用が必要なのかわからないのです。ご説明するだけのデータはありませんが、母親が働いており、子どもに保育を受けさせていても、母親が子どもの心を読み取ろうと行動する機会は十分にあります。そして、世代を超えてセンシティブリティを引き継ぐのに十分な母子間の相互作用があるとも考えています。

乳幼児保育に関する NICHD の研究

訳：小林 登(CRN 所長、国際小児科学会会長、東京大学名誉教授)



訳
に
あ
た
っ
て

私の旧友である NICHD(米国・国立小児保健・人間発達研究所)の Center for Research for Mother and Children の Director, Dr. Sumner Yaffe にいただいた資料のなかに NICHD が一般向けに公表した Robin Peth-Pierce による“ The NICHD Study of Early Child Care ”(乳幼児保育に関する NICHD の研究)というパンフレットがあり、有益な資料と考えたので NICHD の許可を得て、ここに全訳を發表することにした。21 世紀は、母親単独による子育ては少なくなり、母親・父親、そして保育者がチームを組んで行う子育てが中心となろう。以下、ここに全文を紹介し、そのような問題を考える参考としていただくとともに、それぞれの立場からよりよい子育てのあり方を確立する運動をしようではないか。

なお、翻訳にあたっては、以下のことに留意した。まず、わが国では、「保育」は施設などにおける集団的な子育てをさし、家庭での親なりによる「育児」とは区別されている。英語ではそれがなく“ child care ”一つである。その点、翻訳にあたっての区別が困難であった。また、“ interaction ”は相互作用と訳したが、母子間の行動のやりとりであって、平たい言葉で言えば「ふれあい」である。“ sensitive ”は、子どもの心を読み取る感受性の強いことを意味すると考えられるが、平たく言えば「細やかな心」「優しい心」「デリケートな心」であろう。“ early child care ”をどう訳すか考えたが、一応「乳幼児保育」とした。また、“ in-home care giver ”は子どもの家庭を訪問し子育てする者によると考え「在宅保育」、 “ child care home provider ”は自分の家に子どもを預かり子育てする者によると考え「家庭保育」、 “ center-based care ”は制度的に認められた施設での子育てと考え「保育園による保育」とした。なお、文中内容の重複する部分は削除した。

全文翻訳

米国における保育

保育は米国の多くの家庭にとって、まさに人生の現実になりつつある。妊娠後、労働力に参入あるいは留まったりする女性の数が増え(註:子どもが生まれるため収入を増やす必要上か)、また一人親も増えるにつれて、乳幼児や子どもの保育を母親以外に任せる家族が増えつつある。1975年には、6才未満の子どもを持つ母親の39%が家庭の外で働いていたが、現在、その割合は62%である(労働統計局)。こうした母親のほとんどが、出産後3~5ヵ月で仕事に復帰するため、子どもたちは乳幼児期のほとんどをさまざまな保育状況で過ごすことになる。

「乳幼児保育に関するNICHDの研究」について

「乳幼児保育に関するNICHDの研究」は、保育における多様性が子どもの発育にどのように関係するか調べる、今日、最も包括的な保育についての研究である。1991年、国立小児保健・人間発達研究所(NICHD)の支援を受けた研究者チームは、1364人の子どもに研究に参加してもらい、その後7年間にわたり、ほとんどの子どもについて追跡調査を行った。過去2年間、生後3年間の保育と子どもの発育との関係について研究結果を発表してきたが、今後も全米10カ所にある保育研究拠点から集めた情報の分析を続ける予定である。

乳幼児保育に関するNICHDの研究は、どのような問いに答えるのか

この研究は、保育は子どもにとってよいことか、あるいは悪いことかという普遍的な問いかけを超えて、保育のあり方の違いについての側面 たとえば質と量 が、子どもの発達のさまざまな側面にいかに関係するかに焦点を当てることで、われわれが子どもの発達と保育との関係を理解するのを助けることが目的である。より具体的に言うと、認知・言語発達、母子関係、自制、素直さ、問題行動、同年代の子どもたちとの関係、身体的な健康と、保育との関係を評価している。

研究に参加した子どもと家族：どんな人たちが

1991年に始まった研究には、米国中からさまざまな経済的・人種的背景の子どもたち合計1364人とその家族が参加した。対象家族は全米10カ所で採用され、その社会経済的背景、人種、家族構成もいろいろであった。76%の家族が非ヒスパニック系白人、13%近くが黒人、6%がヒスパニック系、1%がアジア系/太平洋諸島系/アメリカ・インディアンで、4%がその他の少数民族である。これは米国全体の人々の人種構成を反映している。こうした多様性によって、異なる民族出身の子どもたちが、保育の異なる特徴に、違う形で影響を受ける可能性が調査できる。

人種の多様性を反映させただけでなく、い

ろいろな学歴の母親とそのパートナーを参加者に含めた。母親の約 10 %の学歴は 12 年生未満で、20 %強が高校を卒業している。3 分の 1 がなんらかのカレッジを卒業しており、20 %が学士号を取得、15 %が大学院あるいは専門的な学位の保持者である(米国人人口全体では、それぞれ 24 %、30 %、27 %、12 %、6 %である)。

社会経済的な地位については、研究に参加した家族の平均所得は 3 万 7781 ドル(約 400 万円)であった(米国家庭の平均所得は 3 万 6875 ドル)。そして、研究参加者のおよそ 20 %が国の生活補助を受けている。

この研究に参加した子どもたちは、どのような種類の保育を利用したか

この研究では、研究者ではなく親が、子どもが受ける保育の種類と時期を決定した。事実、家族は、保育を利用するかどうかの計画に関係なくこの研究に参加した。子どもたちは、いろいろな育児・保育環境におかれた。父親、他の親戚、在宅保育者、家庭保育者、保育園による保育などである。保育の状況は、正式な訓練を受けた保育者が一人の子どもを預かるものから、何人かの子どもを預かる保育所のプログラムまで、さまざまであった。乳児の半数近くが最初に受けた育児・保育は、親戚によるものだった。しかし、生後 1 年、またその後にかけて、保育所と家庭でのデイケアの利用への移行が見られた。

本研究では、保育の種類を管理したり選択したりせず、同時に保育の質も管理したり選択したりしようとはしなかった。保育の質は数種類の方法で測定され、非常にばらつきがあ

った。しかし、全国規模で保育の質を測定した研究はないので、本研究における育児・保育が、全国的な子育てのあり方の代表としてどれだけ適切か判断する方法はなかった。

育児・保育・家族、子どもに関するどのような情報を考慮したのか

研究チームは子どもとその環境にかかわる数多くの特徴について、さまざまな種類の情報を集め、研究した。子ども対大人の比率やグループの大きさなどの保育の特徴とともに、保育の質や保育を受ける時間、保育開始年齢、ある子どもが同時に、また長期間に経験した異なる保育環境の数など、子ども一人ひとりの保育経験を評価した。家族の経済状況や家族構成(一人親またはパートナーのいる親)、母親の語彙(知性に代るもの)など、家族の特徴も評価した。その他家族に関しては、母親の学歴、心理的な適応性(アンケートによる測定)、育児姿勢、母子間の相互作用の質、そして子どもの最適な発育のために家庭環境がどの程度貢献しているかなどの項目を分析に含めた。性別や性格など、子ども一人ひとりのさまざまな特徴も考慮した。

この研究では、家族や子どもの性格による影響に加え、育児・保育の特徴と経験がどのように子どもの発達に独特な貢献をしているか明らかにしようとしている。これまでの研究で、一般的に家族内で子どもが受ける育児の質は、保育における質と非常に似通っていることが立証されている。そこで、当研究チームは、保育が子どもの発達に貢献しているこの他の点について重点的に調べることにした。

データは子どもの発育についてのさまざま

な研究問題に答えるべく、いろいろと異なった方法で分析されたため、必ずしもすべての項目が分析に含まれるわけではない。以下に報告する研究結果の要約には、関連項目のリストが記されている。

乳幼児保育に関する NICHD の研究:
私たちは何を学んだか

多様な情報源(親、保育者、訓練を受けた観察者、試験者)を使い、生後7年間にわたり、家族環境、育児・保育環境、子どもの発達、身体的な成長と健康状況に関する細かい情報を集めた。

参考文献(CRN ホームページ参照)に記載されるように、今日までに本研究に関する論文はいくつかの科学関係の学術誌に発表されている。また、他の研究結果については、学会で発表されたり、出版準備が進められている。「NICHD 乳幼児保育研究」チームが共同執筆した論文では、研究問題が幅広く取り上げられている。

研究結果は、おもな4分野に分類できる。最初の記述的な成果では、NICHDの研究に参加した子どもたちが受けた保育のイメージを描写している。これには、大人対子どもの比率、生後1年間に受けた保育の形、貧しい子どもの保育などの「管理可能」な特徴についての調査が含まれる。他の分野は、保育を受ける子どもにとっての家族の役割、子どもの発達と保育との関係、母子関係と保育との関係だ。こうした分野のなかで、より裕福な家庭と低所得家庭の子ども、また、非ヒスパニック系白人と少数民族の子どもにとって、保育経験がどの程度彼らの発達に関連しているか

を比較し、その結果が示されている。さらに、子どもの行動あるいは母子間の相互作用の度合いを予測するものとして、現在と過去との保育経験の比較もなされている。

NICHD の研究における保育の詳細な報告

1. 生後1年間の保育経験歴

子どもが保育を受けた時間の長さは、いろいろであった。平均的な保育時間は週に33時間であったが、これも子どもとその家族の民族性によって異なる。非ヒスパニック系白人は保育時間が最も短く、非ヒスパニック系黒人は最も長かった。ヒスパニック系白人とその他の民族は、その中間に位置している。

一般的に、ほとんどの乳児が生後1年間に2種類以上の育児・保育環境を経験していた。乳児の半数近くは父親/パートナー、あるいは祖父母による育児が最初の育児経験で、20%強が家庭保育、保育園に預けられたのはわずか8%だった。ほとんどの乳児は4カ月になる前に保育を経験している。

全体的にみて、研究結果は乳児保育への高い依存度ときわめて早い時期の保育の開始を示している。ほとんどの乳児は生後1年間に保育所ではなく、公的ではない保育環境で過ごしている。

2. 貧困は保育経験と関連性があるか

本研究に参加した家族・子どもの35%近くが、貧困状態あるいはそれに近い状態で生活している。貧困は、家庭の経済状況を測る標準的な方法である所得対必要生活費率によって定義された(米国商務省)。これは、連

邦政府からの補助金を除いた家計所得を、その世帯に当てはまる貧困水準所得で割って計算する(1991年現在の4人家族の貧困水準所得は、1万3924ドル)。本研究に参加した家族のうち、所得対必要生活費率が1.0を下回る家族は16.7%、1.0～1.99の家族は18.4%であった。

研究チームは、生後1年間の貧困が、保育開始年齢や保育の種類、質・量と関連性があるか質問した。貧困が利用する保育の特徴を決定する要因になるかを判断するため、貧困家庭およびその子どもたちを(所得対必要生活費率1.0未満)、貧困に近い家庭と子どもたち(所得対必要生活費率1.0～1.99)あるいは、より裕福な家庭と比較した。

保育開始年齢については、貧困状態に陥り、抜け出した家庭(一時的貧困といわれる)が、生後3カ月前という非常に早い時期に保育を始める傾向が最も高かった。そこで研究チームは、この保育の早期開始は、家族を貧困から抜け出させるために、母親が長時間の雇用に就く必要があるためではないかと仮説を立てた。一貫して貧しく、国からの援助を15カ月以上受けていた家庭では、早期保育や、生後15カ月の時点でなんらかの保育を受ける可能性はより低かった。

貧困家庭は、他の家庭に比べて、どのような保育であれ利用する可能性が低い。利用している場合は、他の所得グループの家庭と同じぐらいの時間を保育にあてていた。15カ月時点で保育未経験の子ども之母親は教育レベルが最も低く、大家族の出身であった。こうした大家族も、継続的に貧困状態におかれる傾向にある。

一般的に、家庭環境で(家庭保育者あるい

は家族によって)保育を受けた貧困家庭の子どもたちは、比較的、質の低い保育を受けていた。一方、貧困家庭の子どもで保育園に預けられた場合、裕福な子どもが受ける保育園での保育と匹敵する、より質の高い保育を受けていた。貧困に近い家庭の子どもたち(所得対必要生活費率1.0～1.99)は、貧困家庭の子どもたちよりも質の低い施設での保育を受けていた。これは、おそらく、貧困に近い家庭の子どもたちは、貧困家庭の子どもたちが受ける資格のある補助金付きの保育を受ける資格がないからであろう。

まとめると、貧困家庭また貧困に近い家庭の乳児は、比較的質の低い保育を受ける可能性が高い。これは、生後1年間、ほとんどの乳児が保育園に預けられないのが一因である。

3. 質の高い保育を構成する保育の特徴

研究チームは積極的な保育、つまり質の高い保育に寄与する特徴とは何かを見極めるために、さまざまな保育環境を研究した。積極的な保育は、相互作用の頻度を観察・記録し、その質を格付けすることで測定される。また、保育環境も、グループの大きさ、大人対子どもの比率、物理的な環境などの「管理可能な」特徴あるいは政府のすすめるガイドラインの観点、さらには正式な教育や専門訓練、保育経験、育児に対する信念など、保育者の特徴という観点から測定された。

調査の結果、次のことがわかった。すなわち、他と比べて安全で清潔であり、刺激的な生活環境を有し、小規模グループで、大人1人に対する子どもの比率が低く、子どもに感情を表現させ、その意見を取り入れる保育者

のいる割合の高い保育環境においては、より子どもの心を読み取る力が強く、敏感で、知的な刺激を与える保育者がいた。つまり、よりよい子どもの発達に結びつくであろう保育の質である。

4. 人口統計学的特徴と家族の特徴:利用される保育の種類と関連性があるか

本研究の目的の一つは、人口統計学上の変数そして家族についての変数が、各家庭の利用する保育の種類にどの程度関係するか調べることであった。研究チームは、人口統計学的特徴(民族、母親の学歴、家族構成)、経済的特徴(母親や家族の所得)、家族の質の特徴(母親の姿勢と信念、家庭環境の質)などの3組の変数を検証し、保育開始年齢、保育の種類、質・量との関係を調べた。

家計は、おもに保育の量、開始年齢、種類、質に影響を及ぼしている。母親の所得への依存度が高い家庭では、依存度が低い家庭に比べて早期に保育を開始し、保育にかかる時間も長かった。母親が被雇用者で最高所得額を得ている場合、生後3~5カ月で乳児保育を開始する可能性が高く、生後15カ月間に在宅保育を利用する可能性が最も高かった。最低所得層と最高所得層の家庭の子どもは、中間所得層の子どもよりも質の高い保育を受けていた。

経済的な要素(母親および家族の所得)とは別に、母親の就業が子どもの成長により影響を与えると信じる母親は、乳児の時に保育を開始し、多く利用する選択をしていた。一方、就業が子どもにリスクを与えると思う母親は、形式によらない、家族中心のあるいは在宅での保育を選ぶ傾向にあった。就業が子ど

もに与えるリスクは低いと考える母親は、保育所あるいは家庭での正式な保育を利用する可能性が高かった。

5. 長時間保育を受けている子どもと、母親がほとんど全面的に世話をしている子どもへの家族の影響

本研究のもう一つの目的は、母親がほとんど全面的に世話をしている子ども(保育時間が週10時間未満)と長時間保育を受けている子ども(保育時間が週30時間超)の保育における家族の影響を比較することである。

家計や母親の学歴などの家族の特徴は、子どもの発育を予測するうえで効果的な指標となる。これは、母親の世話をほとんど全面的に受けている子どもの場合も長時間保育を受けている子どもの場合も同様である。ここでの結果は、子どもの発育への家族の影響は、両親以外が長時間保育しても大きく減ったり変わったりすることがないことを示した。

6. 保育と母子の愛着の関係

研究チームは保育の量、保育開始年齢、保育の種類など保育についての変数をいくつか検証し、こうした要素が乳幼児の母親への愛着にどれだけ関係するか調べた。愛着とは、母親への信頼感のことである。

研究チームは、生後15カ月の時点では、保育自体が乳幼児の母親への愛着の安定性に悪影響を与えることもなければ促進することもないことを発見した。愛着は、30分間に母親と子どもを離れさせてから、また一緒にするという標準的なやり方で測定した。

確かに、ある特定の保育条件と特定の家庭環境との組み合わせは、乳幼児の母親へ

の愛着が不安定になる可能性を高めた。質の低い保育を週に10時間以上受けた場合、あるいは生後15カ月間に2カ所以上の保育環境におかれた場合は、母親がやや思いやりに欠ける場合に限るものの、母親への愛着が不安定になる可能性が高い。たとえば、子どもを読み取る力が強く細やかな子育てという点で、母親と保育者の両方が調査対象人口の下位25%に入る場合、子どもが母親に安定した愛着を持つ可能性は、ほんの45%だった。対照的に、より思いやりの深い母親と保育者の場合は、62%が安定した愛着を持っていた。

7. 保育と母子間の相互作用の質

子どもの母親への愛着の分析に加えて、保育と母子間の相互作用、または母子間の交流との関係についても研究した。研究対象となった母親の行動は、子どもを読み取る細やかさ、積極的な関与と否定的態度である。子どもの行動は、その関与を評価するために観察された。研究者は保育の質、量、家族の特徴(母親の学歴と所得)を分析し、子どもが6カ月、15カ月、24カ月、36カ月時点での母子間の相互作用との関係を調べた。

母子間の相互作用は、遊びの時間や家庭で母子が一緒にいるところをビデオに撮影し、母親の子どもに対する態度を観察した。具体的には、複数の相対する作業に直面した時に(例:子どもを見守りながら、インタビュアーと話をする)、母親がどれだけ注意深く、敏感で、積極的な愛情を見せ、あるいは抑制的な態度を見せるか観察した。

研究者は保育の質・量と母子間の相互作

用の質とに、わずかではあるものの統計的に重要な関係があることを発見した。保育の量が増えるにつれて、母子間の相互作用の細やかさや親密さが薄れるという関連性が、ささやかながら現われた。生後3年間を通じて母親以外のケアを受ける時間が長いほど、子どもに対する母親の積極的な行動がいくらか減少した。保育を受ける時間が長かった乳幼児は、母親との関与がやや薄かった。

これまでの調査で明らかになった保育の量と母子相互作用との間に、このような関連性が発見されたことで、研究チームは乳幼児期の保育の量が、その後の母子相互作用の質に関係するだろうかという疑問へと導かれていった。

研究者は、36カ月の時点で、生後6カ月の間の保育時間が長いほど、母親の子どもを読み取る細やかさが減少し、子どもへの積極的な関与が低いことを発見した。しかし、子どもの保育経験より所得や母親の学歴、両親が揃っていること、母親の離別の不安、母親の気分的な落ち込みなどの家族と家庭の特徴の方が、母子相互作用の質に深く関係していた。

質の高い保育(保育者と子どもの積極的な相互作用)は、母親による関与と子どもの心を読み取る細やかさの増加(生後15カ月と36カ月の時点)、子どもと母親の積極的な関与(生後36カ月の時点)の増加とささやかながら関係があった。質の高いフルタイムの保育を利用している低所得の母親は、保育を利用していない低所得の母親あるいは質の低いフルタイムの保育を利用している低所得の母親に比べて、6カ月の時点で、積極的な関与の度合いが高かった。

8. 保育と素直さ、自制、問題行動

保育の特徴(質、量、保育開始年齢、種類、安定性)と家族の特徴を検証し、それがどのように子どもの素直さ、自制、問題行動と関係しているかを調べた。その結果、子どもの保育経験よりも家族の特徴(とくに母親の子どもの心を読み取る細やかさ)の方が、子どもの行動に強い関係があることがわかった。

研究者は、保育の特徴は子どもの素直さ、自制、問題行動と、ささやかな関係がある程度だと判断した。このなかで、保育の質は、子どもの行動と最も一貫した関連性を持っていた。より細やかで繊細な配慮が受けられる保育に預けられている子どもは、2～3歳時点で、保育者が報告した問題行動の数が少なかった。

生後2年間に保育に預けられる時間が長いと、2歳の時点で保育者が報告する問題行動は多かったが、こうした影響は3歳までには消滅していた。3人以上の子どもとグループで時間を過ごすことのできた子どもは、行動に関する問題(保育者による報告)がより少なく、保育におけるより強い協調性が見られた。

9. 生後3年間の保育と子どもの認知・言語発達

本研究のもう一つのおもな目標は、保育の特徴(質、保育時間、種類、安定性)が、子どもの認知・言語発達や就学レディネスに関係するかどうか判断することであった。子どもの認知発達と就学レディネスは、標準テストを利用して測定した。言語発達は、標準テストと母親からの報告書を用いて評価した。質の高い保育は、積極的な保育の提供と言語的な刺

激と定義された。つまり、保育者がどれだけ頻繁に子どもに話しかけたり、質問をしたり、子どもの問いに答えたりしたか、である。

生後3年間の保育の質は、子どもの認知・言語発達に、わずかながら一貫した関係を持っている。保育の質が高い(積極的な言語的刺激と子どもと保育者との相互作用が多い)ほど、15カ月、24カ月、36カ月時点での子どもの言語能力、2歳時点での認知発達が優れており、3歳時点での就学レディネスも高いことが示された。

しかし、ここでも、家計や母親の語彙、家庭環境、母親による認知的な刺激などの要素を合せると、これの方が、15カ月、24カ月、36カ月時点での認知発達、および36カ月時点での言語発達と強い関係があった。

認知発達に関しては、母親による長時間の育児は子どもにとってなんらプラスにならないことがわかった。長時間、母親が世話をしている子どもの認知・言語測定での点数は、保育されている子どもと同じぐらいの事例が多かった。実際、長時間母親が世話をしている子どもと、保育を受けている子どもとを比べた時に、認知・言語結果において現われた数少ない差異は、長時間の母親による育児に比べて質の高い保育は有利で、質の低い保育は不利だということであった。保育者と子どもの相互作用の質を考慮した場合、週10時間以上保育されている子どものなかでは、保育所に預けられている子ども、そして、やや少ない度合いではあるが、家庭保育を受けている子どもは、それ以外の保育を受けている子どもに比べて認知・言語測定での成績がよかった。保育経験と子どもの認知・言語・就学レディネスとの関係では、さまざまな所得グルー

ブあるいは民族的な背景による違いはなかった。

10. 規制可能な保育の特徴と子どもの発育

本研究のさらなる目的は、保育園の「管理可能」な面と子どもの発達との関係を調べることであった。教育者、小児科医、公衆衛生の専門家からなる専門機関の助言に従い、子ども対スタッフ比率、グループの大きさ、教師の訓練、教師の教育の4項目を分析に利用した。

研究チームは子ども対スタッフ比率、グループの大きさ、教師の訓練、教師の教育について、助言された4つのガイドラインすべてを満たしている保育園はほとんどないことがわかった。ガイドラインの遵守度が高い保育園に預けられている子どもは、36カ月の時点で、言語能力と就学レディネスがより高かった。また、24カ月と36カ月の時点では、問題行動も少なかった。ガイドラインを一つも満たしていない保育施設に預けられた子どもは、こうしたテストの成績が平均より低かった。

まとめ

「乳幼児保育に関するNICHHDの研究」は1364人の子どもを対象とし、そのほとんどを7歳まで追跡調査し、異なる保育の形態が子どもの発達にいかに関係するか調べた。これまでの科学論文は、生後3年間を中心に書かれてきた。子どもの育児・保育環境は、そのコミュニティで提供される保育の種類、費用の手頃さなどを考慮し、家族が選んだものであり、無作為にさまざまな種類、質、量の保育に

振り分けたわけではない。研究に参加した家族は、多くの人口統計学的な特徴において、米国全体を代表するものであった。

NICHHDの研究では、全米の家族にとって、家族の状況と家庭環境の質が、保育の選択と強い関係を持つ。そこで研究チームは、すでに十分に認識されている家族の特徴・状況と子どもの発達との関係という重要な点に加えて、子供の発育に保育がどのように独自に貢献しているか見出すことに焦点を当てた。

本研究の分析結果は、育児・保育に関する多くの質問になんらかの答えを与えるものとなるだろう。いま、多くの米国家庭がもつ育児・保育像を捉えることができるようになった。どのくらいの頻度で、どのくらい早期に保育が始まるか、また、今日の家庭の多くがどういった種類の保育環境を選ぶかなどを垣間見ることができる。研究ではまた、長時間保育を受けた子どもと母親がほとんど全面的に世話をしている子どもとを比較し、家族の特徴と子どもの発育との関係も検証した。そして、家族の特徴が乳幼児が受ける保育経験と関係があるかどうかを評価した。最後には、保育の特徴と、子どもの知的発達、言語発達、就学レディネスとの関係、および保育の特徴と母子関係との関連性を検証した。

研究チームは、家族や子ども一人ひとりの性格に加え、保育が子どもの発育に与える新たなあるいはマイナスの価値を探した。一般的に、保育の要素よりも、家族の特徴と母子関係の質の方が、子どもの発達に強い関連性をもっていた。これは、子どもが長時間保育を受けている場合でも、おもに母親が世話をしている場合でも当てはまる。

研究では、保育のある特徴や経験が、ほん

のわずかではあるが、子どもの発達に影響を与えることがわかった。研究の結果認められた保育の影響は概してわずかだが、取るに足らないとはいえないものである。

質の高い保育は、次の点に結びつくことが発見された。

- ・ 母子関係がよりよくなる。
- ・ 細やかさに欠ける母親の場合でも、乳幼児が不安定な愛着を持つ可能性が低い。
- ・ 子どもの問題行動の報告が少ない。
- ・ 保育を受ける子どもの認知能力が高い。
- ・ 子どもの言語能力が高い。
- ・ 就学レディネスが高い。

逆もまた真なりである。質の低い保育は、以下に結びつく。

- ・ 母子関係の調和度が低い。
- ・ すでに赤ちゃんの心を読み取る細やかさに欠ける母親の場合に、母子の愛着がさらに不安定になる可能性が高い。
- ・ 問題行動が多く、認知・言語能力、就学レディネスがともに低い。

より長時間の保育、あるいはより長時間の保育歴は、以下に結びつく。

- ・ 母子間の相互作用が弱い。
- ・ 2歳時点で問題行動に関する報告が多い。
- ・ 細やかさに欠ける母親の場合に、乳幼児が不安定な愛着をもつ可能性が高い。

より短時間の保育は、以下に結びつく。

- ・ 母子間の相互作用がよりよくなる。
- ・ 赤ちゃんの心を読み取る細やかさに欠ける母親の場合でも、乳幼児が不安定な愛着をもつ可能性が低い。
- ・ 24カ月における問題行動が少ない。

保育園での保育は、他の環境での同様の質の保育に比べ、認知・言語能力、就学レディネスともにより高い。グループ保育は、3歳の時点で、問題行動の報告の少なさにつながっている。したがって、乳幼児保育の経験は、子どもにとって意味があるといえる。

新しい保育環境に入る回数で測られる保育の不安定さは、母親が細やかさに欠け、敏感でない場合に、乳幼児が不安定な愛着をもつ可能性の高さにつながるということがわかった。

本研究に参加した子どものほとんどは、現在、7歳で1年生である。研究チームでは、今後数年も、今回の調査では解明されなかった保育と子どもの発達との関係についての疑問を明らかにするためにデータの分析を続け、専門家会議や科学関係の学術誌を通じて、新たな研究成果を発表していくつもりである。

*「小児科診療」第63巻 - 第7号(診断と治療社)より抜粋。今回の研究に関する研究者・研究機関および参考文献一覧は、CRNのホームページを参照してください。



働く母親の声

「子育て生活基本調査」、「幼児の生活アンケート」、「総務庁国民生活基礎調査」、およびシンポジウム参加者アンケートから

高木 友子(郡山女子大学講師)

ベネッセ教育研究所が行った「子育て生活基本調査」、「幼児の生活アンケート」、そして本日この会場にいらっしゃる働くお母様などから寄せられたアンケートの回答をもとに、日本の働く母親の現状と、母親たちが今感じていることをご紹介します。皆さんの身近にいる働く母親の声に、しばし耳を傾けてみてください。

図1は、日本に働く母親がどのくらいいるのかを表したものです。□の部分には父親も母親も働いていることを、■の部分には母親だけが働いていることを示しています。「0歳～2歳」でこれらを合わせると約25%、「3歳以上」では40%以上の家庭で、母親が働いていることがわかります。つまり、4世帯に1世帯は母親も仕事を持っており、働く母親

は決して特別な存在ではないことがおわかりいただけるでしょう。

さて、そんな母親たちは、育児についてどのように感じているのでしょうか。図2は、「子育てはどれくらい楽しいですか」という問いを「フルタイム就労」「パートタイム就労」、そして「専業主婦」の母親に質問した結果を表したものです。■の部分「とても楽しい」と回答した母親の比率です。これを見ると、「フルタイム就労」の母親が育児を「とても楽しい」と感じている割合が高いことがわかります。また、「子どもと一緒に遊んでいる時」や「子どもが園や学校での様子を話してくれている時」に「子育てをとても楽しいと感じる」と回答した母親の比率を見ると、「フルタイム就労」の母親が答える割合が最も高くなってい

図1 母親の就労割合

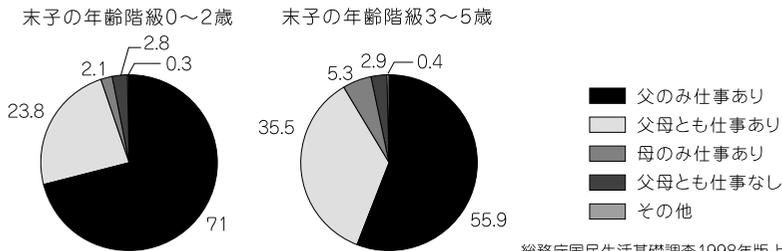


図2 子育ての楽しさ



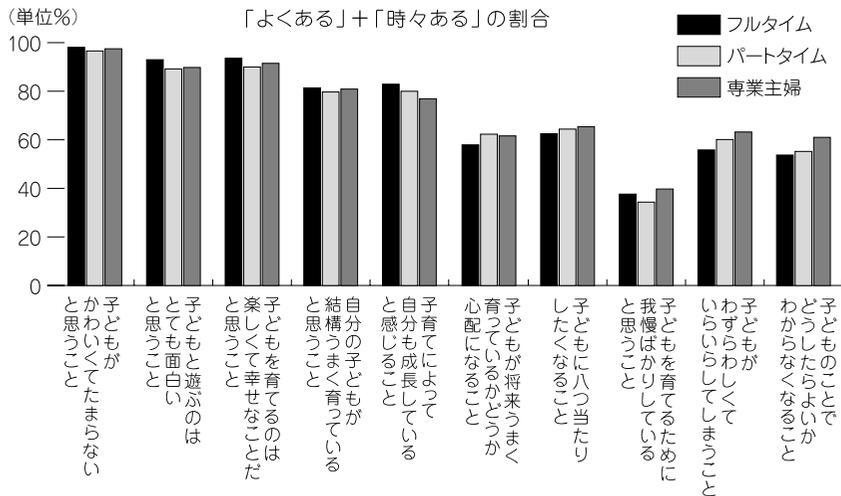
ました。

次に図3をご覧ください。左から5つ目までの項目は、子育てに対して肯定的な感情を抱いている母親の割合です。たとえば、「子育てによって自分も成長していると感じる」母親は、「専業主婦」よりも「フルタイム就労」のほうがやや比率が高いことがわかります。一方、6つ目以後の項目は、子育てに対する不安を抱いている母親の割合です。このような不安を感じている母親は、逆に「専業主婦」の方がやや比率が高いことがわかります。

主婦」の方がやや比率が高いことがわかります。

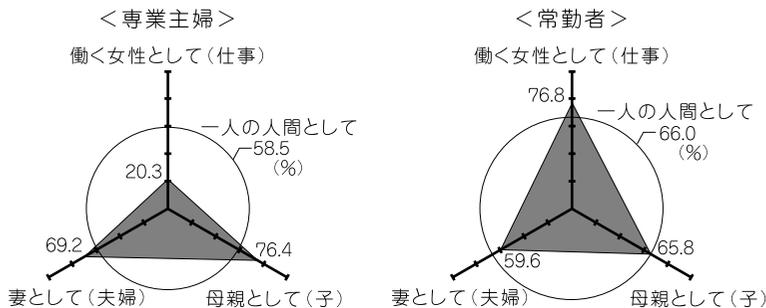
図4は「専業主婦」と「フルタイム就労」の母親の自己評価を表したものです。「フルタイム就労」の母親は、きれいな正三角形が描けていますね。正三角形が描けるということは、母親のアイデンティティが安定していることを意味します。フリードマン先生のご報告にもありましたように、母親が精神的に安定していると、子育てにもいい影響が出ると考えられます。

図3 育児への感情



ベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート」より作成

図4 母親の自己評価



ベネッセ教育研究所「子育て生活基本調査報告書」より作成

ここで、参加者アンケートを見てみましょう。働く母親たちは育児について「のびのびと育てたい」「スキンシップを大切にしたい」、でも「しつけもしっかりしたい」し、「健康は大切に」しなきゃ、それから「子育てを子どもと一緒に楽しみたい」と考えています。しかし、一方では悩みや不満も抱えています。

何が問題かと申しますと、「どうしても時間が足りない」「父親が育児に関わってくれない」「育児に対してストレスを感じる」「なぜ仕事を持っている母親にだけ負担がかかるのか」など。また、「仕事を持っていることで子どもに寂しい思いをさせているのではないか」「余裕がなくて子どもにじっくり向き合えていない気がする」といった声も多く聞かれました。

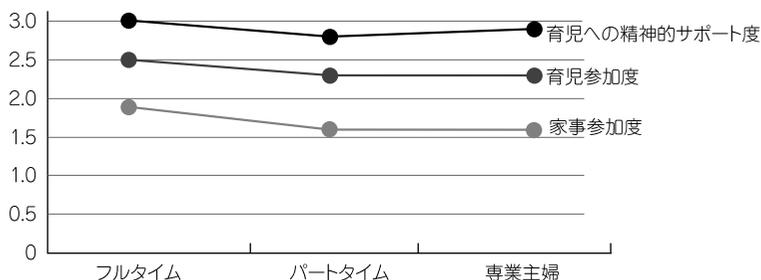
図5は父親の育児・家事への参加度を表したものです。「家事への参加度」が低いですね。母親が「フルタイム就労」の家庭の方が父親の「育児への参加度」「家事への参加度」がやや上がる傾向はありますが、実際のところは母親への負担はまだまだ大きいのが現状です。参加者アンケートでも「子どもが小さいときは、ちょっとでも面倒見てくれると精神的にもホッとします」「一緒に子育てしてほ

しい」「子どもとたくさん遊んでほしい」「困っているときに協力してほしい」「相談にのってほしい」という声が寄せられていました。また、一方で「いくら父親に育児に参加したいという意思があっても、会社や社会が変わらないとそれを許してくれない」という声も寄せられています。父親にも育児に関わってほしい、そのためには社会が変わってほしいという声です。

そんな悩み多き母親が父親とともに頼りにしているのが、図6にあげた人(場)です。「母親」「友達」「会社の同僚」の比率が高くなっていますが、ご注目いただきたいのは、「幼稚園・保育園」「小児科医」の数値です。「フルタイム就労」の母親は、「幼稚園・保育園」を大変頼りにしていて、「小児科医」を頼りにする割合も「専業主婦」や「パートタイム就労」の母親に比べると高くなっています。こういう方々を頼りにして、働く母親たちは育児を頑張っているわけです。

しかし、何かあったときに、保育士の先生や周囲の方から、『お母さんが働いていらっしゃるから』と言われるのがとてもつらい」という話を聞いたこともあります。自分を責めて、

図5 父親の育児・家事への参加



*数値は、父親の関わりについて項目ごとに1点から4点までの得点化を行い、上記3つの領域について平均得点を算出したもの。数値が大きいほうが関わり度が高い。

ベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート」より作成

ぎりぎりのところで頑張っている母親も少なくありません。そういう母親をさらに周囲が責め、追い詰めることが、はたして母親のために、そして子どものためになるのかと、最近考えます。

最後に、CRN が開設しているホームページのフォーラムからのエピソードをご紹介します。ある保育士の先生が1歳児のクラスを受け持っていた時のお話です。その先生が「お母さんと私と2人で協力して一生懸命育てましょう」とある母親に言ったそうです。それから20数年経ちました。たくさんの子どもを受け持ってきたわけですから、一人ひとりの子どものことが日々頭のなかに残っているというわけはありませんね。忘れた頃になってその先生のところに、あの母親から娘さんの結婚式の招待状が届いたそうです。結婚式当日、その会場に参りましたら、その母親が涙を流しながら、「あなたがいてくれたから、この子はこんなに立派になりました」とおっしゃったそうです。

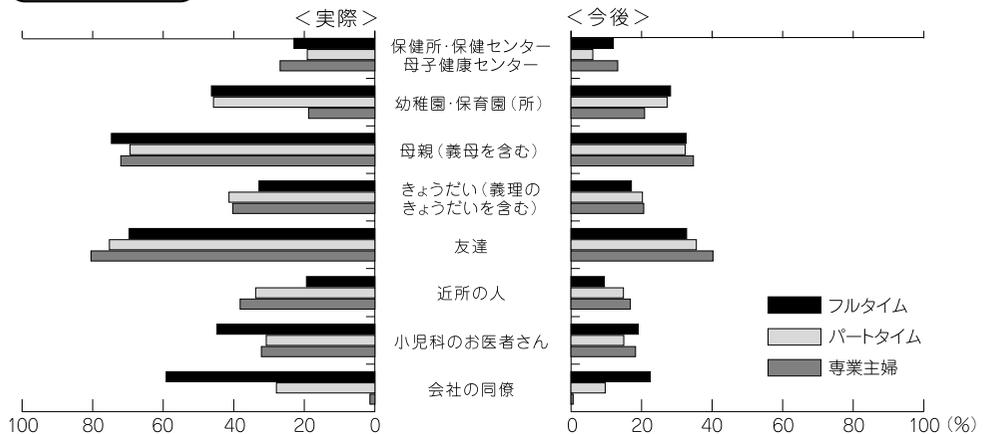
では、子どもはどう思っているのでしょうか。フォーラムから集めた意見で、もう成人された方が自分の子ども時代を振り返って「仕事を

持っている母親にこんなふうに言ってほしかった / こうしてもらえれば安心できた」という言葉として、「仕事で参観日に行けなくなつて、あんたのおかんはここにおるやろ。寂しがらんでもよろしい。なんかあったらとんでいく。あんたが元気やから、おかんは仕事ができるねん」をあげていました。「何かあったらとんでいく」、そういう言葉がほしかったと子ども時代を振り返っていました。

ご紹介したように、お母さんも子どもさんも非常に頑張っています。今日会場にいらっしゃるお父様、保育士の先生方、そしてお医者様、研究者の皆さんにお願いしたいことは、決して母親を追い詰めることなく、「一緒に育てよう」と言っていただきたいということです。そうしたら、母親も子どもたちも、もっと楽しく生活できるようになるのではないのでしょうか。

この「一緒に育てよう」、社会のシステムが子どもと一緒に育てることができるようになるということが、21世紀に働く母親と、その子どもたちを迎え入れるキーワードになるのではないかと私は考えております。

図6 相談先



ベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート」より作成